

しなければならぬ」と。他方では我々は、その名譽から仇打ちを命ぜられるところのコルシカ人を思ひ浮べて見る事だ。彼とても銃丸が體內を貫通することを決して願ひはしない。しかし、さうした事に對する豫想が、そんな目に遭ひさうに思はれるといふことは、彼がその名譽を満足させようとするのを妨げないのである……そして總ての品よき行爲に於て我々は、その結果がどうなるかといふことに對して、故らに無頓着にしてゐるではないか？ 我々にとつて有害な結果を來すやうな行爲を避けるといふのは、それは一般に品よき行爲に對する禁止にほかならないであらう。

これとは別の見地からも、右の格言は價值がある。なぜならばそれが人間の一のタイプを裏切り示してゐるからである。それは彼を通して方式化される場所の群畜の本能である。——我々は平等である。我々は互に平等なものを見なし合ふ。私が君に於けるは、君が私に於けると同じである。この點に於て、實際に行爲の等價といふことが信じられてゐる——如何なる現實的事情の下にも、明白に現れることのないところの、行爲の等價といふことが。如何なる行爲も報復されることが出来ない。本當の「個體」の間には、何等の平等なる行爲もない。従つてまた如何なる「報復」もない……私が何かをする時、何等かの同じやうな行爲がある人間に可能だといふ考は夢にも有たない。その行爲は私に屬してゐる。何人も私が爲すところの物に對して拂ひ返すことは出来ないのだ。人は常に私に對して一の「別な」行爲をししかけるだけである。

九二六

ジョン・ステュアート・ミルに反對して。——私は次ぎのやうに言ふところの彼の俗惡さを唾棄する。彼は言ふ、「ある人に正しい事は、他の人にも正しい」と。或は、「汝が他の人々からされたくないやうな事は、他の人々に對してもするな」と。かくの如き原理は、あらゆる行爲が我々になされた物に對する一種の現金拂ひと見えるやうに、人間的交渉全部を相互的給付の上に築き上げようとするのである。この點に於て右の假説は最も深い意味に於て賤劣である。この點に於て、私の行爲と君の行爲との間に價值の等價といふことが假定されてゐる。この點に於て一の行爲の最も個性的な價值が綺麗に抹殺されてゐる（何物によつても賠償返済され得ないところのものが）。「相互性」は一の大きな俗惡さである。私が爲すところのものは、他の人から爲されてはならず、また爲され得ないと云ふこと、等價物といふやうな物は何も無いといふこと（「私の同等者等」の最も傑れたる領域に於て——inter paribusのほかは）、人は一度きりの物であり、またたゞ一度きりの物をのみ爲す故に、一の本當に深刻な意味に於て決して報復しないといふこと——かうした根本的信念こそ群衆に對する貴族的超然性の原因を含んでゐる。なぜと云つて、群衆は「平等」を信じ、従つて償却の可能や「相互性」などを信じしめるからである。

九二七

道徳的評價の、又その「有用」及び「有害」といふやうな概念の狭苦しさ、淺薄さはうまく出来てゐる。それは直接の近い結果をのみ觀測し得る社會にとつて、必要缺くべからざる見地なのである。

政府や政治家は既に一のより、超道徳的な考へ方を必要としてゐる。なぜならば、彼はすつとより複雑な効果を計量しなければならぬからである。

更に又、總ての個々の要求がさしあたり不當で、且つ勝手なものに見える位、それほど廣い展望を有するところの一の世界的經濟も可能であつたらう。

九二八

「自分の感情に従ふべきか？」——一の寛宏な感情にまけて、又その刹那の衝動の下に、その生活を危険に置くといふこと、それは價値の乏しい、特色を發揮しないところの事である。それに對する能力に於ては總ての者が平等である——そしてそれに對する決斷力に於ては犯罪者や、惡漢や、コルシカ人の方がたしかに、ちやんとした人間にまさつてゐる。

より、高き段階は、かうした衝動にも自ら打ち克ち、衝動から英雄的行爲をやらないといふことであ

る。そして寧ろ冷かに、理性的に、悅樂感情のはげしい擾亂に陥らないでゐることである……この事は憐憫の問題にもあてはまる。それは先づ習慣的に理性によつて篩ひ分けられねばならぬ。さうでなかつたら、憐憫は如何なる他の欲情とも同じやうに危険である。

一の欲情に盲目的に打ちまかせてしまふといふことは、それが寛宏なものであると、思ひ遣りの深いものであると、乃至敵意あるものであるとを問はず、最も大なる災厄の原因である。

性格の偉大さは人が此等の欲情を所有してゐないといふことに成立しない。反對に、人は最も恐るべき程度にそれらの欲情を所有してゐなければならぬ。けれども、彼はそれらのものを手綱で以て御して行かなければならぬ……そしてそれも斯うした制御に對する悦びからやるのでなく、寧ろ單に……

九二九

「一の事柄の爲めにその生命を棄てること」——大きな効果。しかし、人は色々の事柄の爲めにその生命を棄てる。諸の欲情は何れも皆満足させられることをねがふ。生命をかけられるのが憐憫であるか、怒りであるか、乃至復讐であるかは、價値の上に何等の變化をも及ぼさない。如何に多くの人々がその生命を可愛い、少女等の爲めに犠牲に供したかよ。そしてより、悪い場合は、その健康をすらも！人にして若し調和を有するならば、彼は本能的に危険な事物を選ぶのである。例へば、人が哲學者で

あるならば、思索上の冒険。或は人が有徳であるならば、不道德の冒険。ある種類の人間は何物をも思ひ切つてやらうとしない。他の種類の人間は思ひ切つてやらうとする。我々後者は生命の輕蔑者であるか？ 反對に、我々は本能的に一の力強くされたる生命を、危険の中なる生命を求める……だが、今一たび繰返して云ふが、その爲めに我々は他の人々より有徳であることをねがふものでない。例へばパスカルは何物をも冒険しようとながはなかつた。そして基督者たることを失はなかつた。人はつねに何物かを犠牲にしてゐるのである。

九三〇

如何に多くの利益を人間は犠牲にするかよ、如何に「利己的」で彼があるかよ！ 彼のあらゆる情緒や欲情がその權利をたしかめようとする。そして情緒が個人的利益の用心深い功利から如何に遠いことぞ！

人は彼の「幸福」を欲求しない。人間がつねに自分の利益を求めてゐるといふことを信じ得る爲めには、人は英吉利人であらねばならぬ。我々の慾望は久しい間の熱情の中に事物を凌辱しようとする。その集積された力は抵抗物を求めるのである。

九三一

諸の欲情はいづれも皆有用である——一は直接に、他は間接に。功用に關しては、何等かの價值等級を確定することは全く不可能である。總じて自然界に於ける諸の力が、經濟的に見て、如何にたしかに善くあらうとも、即ち如何にたしかに有用であらうとも、尙ほ且つそれらの力からも色々の恐るべき、取り返しがたき宿命が生じて來るのである。人の言ひ得た精一杯の事は、最も力強い欲情が最も價值があるといふのであつたらう。そこに如何なるより、大きな力の源泉もない限りに於て。

九三二

好意をもつた、世話好きな、人の善い心持は、必ずしもそれから生ずる功利の爲めに敬重されるのではない。寧ろそれが、よく與へ得るところの、生命の充満感情にその價值を有つてゐるところの富める魂の特有な情態だからである。善行者の目を見入るがよい！ それは自己否定の、自己憎惡の、「パスカル主義」の反對物である。

九三三

要するに、我々に必要なのは諸の欲情を支配することであつて、それを弱めたり滅ぼしたりすることではない！ 意志の支配力が大きければ大きいほど、愈々多くの自由が諸の欲情に與へられ得るのである。

「偉大な人間」は彼の熱望に與へる自由の活動範囲によつて偉大である。並びに、このけばくしい怪物共に御用を勤めさせることの出来る更により、大きな力によつて偉大である。

「善良な人間」は文明の各の段階に於て、同時に危険の少い、そして有用な人間である。一種の中間物である。尋常人によつてなされる表白からすれば、彼の前に人は恐るべき何物をも有せず、又それにも係はず人は彼を輕蔑してはならないのである。

教育——本質的には、原則の爲めに例外を犠牲にしてしまふことの手段。文化——本質的には、凡人に都合のいゝやうに、趣味を非凡人と反對の方向に向はせることの手段。

一の文化が力の氾濫を始末し得る時のみ、それはまた除外例の、實驗の、危険の、ニュアンスの贅澤文化に對する温室でもあり得る。あらゆる貴族主義的文化はかうした傾向を有つてゐる。

#### 九三四

一切は力の問題。如何なる程度まで人は社會の保存條件及び社會の先入見に逆行すべきであるか？

如何なる程度まで人は、多數者等を滅破させるところの彼の恐るべき性質を釋放すべきであるか？

如何なる程度まで人は、眞實に逆らひ、その最もいかにがはしい側を呑み込むことをすべきであるか？

！ 如何なる程度まで人は、苦惱や、自己侮蔑や、憐憫や、病氣や、惡徳などを制御するであらうか  
どうかを疑問としながら、それらの物にまで反對して行くべきであるか？（我々を殺さない者は我々をより、強くする……）——最後に、如何なる程度まで人は、自ら俗惡となることなしに、普通の者、尋常の者、下らない者、善良な者、正直な者、均一的な性質を有する者にまで權利を承認してやるべきであるか？……性格の最も有力な試金石は——善良さの誘惑によつて自らを滅ぼされないこと。贅澤としての、柔弱化としての、惡徳としての善良さ。

#### 4 高貴なる人間

#### 九三五

典型。富の結果であるところの、魂の本當の善良さ、高貴さ、偉大さ。それは受ける爲めに與へるのでない。それは善良であるといふことによつて自らを高めようとしなない。本當の善良さに典型をな

すものとしての浪費。その豫備条件としての、生きた人格の上の富。

九三六

貴族主義。群畜的理想——今社會にとつての最高價值標準にまでなほりつめてゐる。それに一の宇宙的な、否形而上學的な價值を與へようとする企圖。それに對して私は、貴族主義を擁護する。それ自體の内に自由に關するある心遣ひと敏感感を保存してゐるところの一の社會は、それ自らを除外例として感じなければならぬ。又その社會がそれ自らを差別するところの、その社會が敵意を抱きながら見下ろすところの、一の力を向ふに廻はさなければならぬ。

私が權利を放棄すればするほど、私自らを他の者等のレベルの方へ下げて行けば行くほど、愈々私は凡庸な者等の支配下に落ち、終に最大多數者等の支配下に落ちるであらう。一の貴族主義的社會がその各員の間にも高度の自由を保存する爲め、それ自體の内に有たねばならぬ第一條件は、總員の正反對な衝動が、支配への意志が現前してゐることから生じて來るところの極端なる緊張である……

諸君にして若し、力強い對照と、階級差別とを廢棄しようと思ふならば、諸君は更に、力強い愛や、崇高なる心持や、「自己の爲の存在」といふ感情なぞをも廢棄してしまはなければならぬであらう。

\*

自由平等社會の現實的心理學について。——此の如き社會に於て減退するのは何であるか？

自分自身に對し責任を負はうとする意志(これの減退は自治力自律力の弱くなつた徵證である)。最も精神的な事柄に於てすらも、防衛し攻撃する能力。命令する力。畏敬、服事の念、及び沈黙し得ること。大なる欲情。大なる使命。悲劇。快活。

九三七

De Montlosier が彼の著作 De l'anarchie française の中に言つてゐたところのことを、一八一四年オオギュスタン・ティエリイは讀んだ。彼は憤怒の叫びを以て答へた。そして彼の著作に取りかかつた。かの移住民は言つてゐたのである——自由にされた人間の種族、我々の手から引きはなされた奴隸の種族、從屬的な民衆、新しき民衆よ、放恣は自由であるべき汝等にまで許されたが、高貴であるべき我々にまで許されなかつた。我々にとつては一切の物が權利であり、汝等にとつては一切の物が寵恩である。我々は汝等の團體にはいつてゐない。我々は我々自らに於て完全であると。(譯者曰く、原文には佛文の儘で引用してあるのだが、ここには都合上邦譯だけを出して置く)。

九三八

如何に貴族主義的世界が愈々自らを放血して弱くすることぞ！ その高貴なる本能によつてそれは、その特權を放棄し、又その細緻にされたる過度の文化によつてそれは、民衆の爲め、弱者の爲め、貧しき者等の爲め、矮小者の詩などの爲めに自ら利害を感じるやうになる。

## 九三九

そこには一の奥行きのある論結と洞察とを許すところの、一の高貴にして危険なる不注意がある。その不注意をもつてゐるのは自信のある、豊饒極まる魂であつて、その魂は友人達については決して自らを勞しないで、寧ろただ歡待厚遇のみ知つて居り、つねにただ歡待厚遇を實習して居り、また實習することを心得て居る。その胸と家とは、苟くもはいつて來ようとする各の人に對して開かれてゐる。乞食に對してでも、不具者に對してでも、王者に對してでも。これは純粹の懇切懇勸である。それを有する人は百人の「友人」を有するけれども、多分ただ一人の友人をも有しないであらう。

## 九四〇

India & Co. の教は充ち溢れるところの力をもつた人々にあてはまるが、凡庸なる人々にあてはまるな S. by Xpatria 及び Bonvior's はより、高き物への一階段たるにすぎない。その上には「金の自然」が立つてゐる。

「汝當さに爲すべし」——ストイイクの學派に於ける、基督教の、及び亞刺比亞人の教團に於ける、カントの哲學に於ける絶對的服從（ある上長者に對するものであると、ある概念に對するものであるとは問ふところでない）。

「汝當さに爲すべし」より高く立つてゐるのは、「我は爲さむと欲す」（勇者等）である。「我は爲さむと欲す」より高く立つてゐるのは、「我は何々なり」（希臘の神々）である。

蠻人の神々は節度の悦びについて何物をも表白しない。彼等は單純でもなく、輕易でもなく、中庸でもないのである。

## 九四一

我々の庭園及び宮殿の意義は（同じ程度に於て富に對するあらゆる熱望の意義も）、不秩序と俗惡とを目前から遠ざけ、また魂の貴族の爲めに一の郷土を造つてやることである。

多數の人々は勿論、あの美しく靜かな事物等が彼等の上に動きかけた時、彼等がより、高き性格になるであらうことを信じてゐる。伊太利へ行きたがったり旅行をしたがったりなどするのも其爲めであり、あらゆる讀書も、觀劇も其爲めである。民衆は形成されることをねがふ——これが彼等の文化的

勞作の意義である！ けれども強き者等、権力ある者等は形成することをねがひ、そして其周圍に異つた何物をも持たうとねがはないのである！

同じ理由から更に人々は廣々とした自由の中へ出て行く。自らを見出す爲めではなく、寧ろ自然の中に自らを見失ひ、忘却してしまふ爲めである。「自分自身から脱出」しようとするのは、あらゆる弱者等、及び自らに満足せざる者等の願望である。

## 九四二

あるのは單だ生れの貴族ばかり、血の貴族ばかりである。(この場合私は「フアン」と云ふ言葉やゴオタ層について談らない。それは驢馬に對する註句である)。「精神上貴族」が口にされる處では、一般に何物かを隠蔽することの理由が缺けてゐない。それは何人も知れる如く、功名心の強い猶太人の間に於ける合言葉である。けだし、精神だけでは高貴にしない。寧ろ、精神を高貴にするところの何物かが先づ必要である。さらばそれに對して必要なものは何か？ 血統。

## 九四三

何が高貴であるか？

最も外的なものに於ける心遣ひ。この心遣ひが障壁を設け、隔離し、混同されないやうに保護してくれるからである。

言葉や、服装や、態度に於ける浮づいた外觀。それで以て一のストイイクのな冷酷さと自己抑制とが、あらゆるあつかましい好奇心の前に自らを防衛するのである。

ゆつくりした足どり、並びにゆつくりした目遣ひ。價值ある事物は餘り多くあり過ぎるものでない。そしてそれらの事物は價值ある者にまで、自らにして來る。また來ようとねがふのである。我々は嘆賞するに敏でない。

貧しさと乏しさとを、更に病氣をも耐へ忍ぶこと。

たやすく賞讃する各の者に對する不信により、小さな名譽を避けること。なぜと云つて賞讃する者は、彼が賞讃するところの物を理解してゐると信じてゐる。だが理解するとふのは——あの典型的な野心家、バルザックが暴露し示した——comprendre c'est égal (譯者註——理解するといふのは同等の物にすることだ)。

心情を分らせ合ふことに對する我々の疑ひは、随分奥底にまではいつて行く。選ばれたものとしてでなく、寧ろ強ひられたものとしての寂寥孤獨。

我々是我々の同等者等に對してのみ義務を有するといふこと、他の者等に對しては好き勝手に行動

してよいといふことの信念。正義は唯だ同等者等の間にのみ望まれ得るといふこと（悲しいかな、まだまだ暫くの間はこれが會得されないであらう）の信念。

「恵まれた者等」に對する皮肉な見方。道義的な事柄に於ても生れの貴族に對する信仰。名譽をあきらめ得る者として自らを感ずること。しかも彼を尊敬するに足るほどの人間が屢々見出されないといふことを感じながら。

常に假裝してゐること。性格が高くなればなるほど、愈々彼は知られないでゐることを必要とする。若し神にしてあらば、單に行儀正しさの爲めからでも、ただ人間としてのみ地上に自らを示すべきであつた。

ひまにしてゐることの能力。手工は成程如何なる意味にも汚辱するものではないが、たしかに貴族らしさをなくするといふ、絶對的信念を持ち得ること。如何に高く我々が「勤勉」を尊敬し、その處を得させることを知つてゐるとは云へ、町人的意義に於てはそれをしない。或は鷄みたいにがやがや騒ぎ立てるところの、そしてがやがや騒ぎ立てては卵を産み、そしてまたがやがや騒ぎ立てるところの、あの飽くことを知らず騒ぎ立てる藝術家等のやうにはそれをしないのである。

我々は藝術家及び詩人を、また何等かの物に堪能であるところの人々を保護する。しかし乍ら、單に何物かを能くするところのそれらの人々より、單に「生産的な人々」より、より、高き性格をもつた

生物として我々は、我々自らを彼等と混同しない。

諸の形式に對する悦び。一切の形式的なものを擁護すること。禮儀正しさが大きな徳の一であるといふ信念。あらゆる種類の自墮落に對する不信。その自墮落の中には出版上思想上一切の自由もふくめられてゐる。なぜと云つて、それらの事情の下にあつては、精神が安易になり、無作法になり、手足をのばしてしまふからである。

恐らくはより、小さな、けれどもよりこまやかな、より輕やかな種類の一の生物を享樂する如くして婦人を享樂すること。いつも舞踏と、馬鹿らしさと、化粧とをのみ頭に持つてゐる生物に出會ふのは何たる幸福ぞ！ 彼女等は大きな責任感で以て生活を重苦しくされてゐるところの男性の、總ての非常に緊張された、深い魂の狂喜である。

君主等及び僧侶等に對する享樂。なぜならば、一體に彼等は過去の評定に於てすらも人間的價値の差等に對する信仰を實際に保持して居り、少くとも象徴的に保持して居るからである。

沈黙し得ること。けれども聽者を前にしてはこれについて何等の言葉もなきこと。久しき敵對に堪へること。たやすき和解の力を缺いてゐること。

煽動政治家に對する、「開明」に對する、「親み易さ」に對する、賤民的な「距てなさ」に對する嘔吐感。



一の高き、選り好みをする魂の必要物であるところの、貴重品の蒐集。何物をも共有しようと思はないこと。彼自身の書物、彼自身の風景。

悪しき、また善き経験に對して我々は抗争し、そしてあまりに速く概括化しない。特殊の場合。特殊の場合が自らを原則として立振舞はうといふ悪趣味を有する時、その特殊の場合に對して我々は如何に皮肉な態度になることぞ！

我々はナイイフな物と、ナイイフな人間とを愛する。但し傍觀者として、又より、高き生き物として。我々はファウストをも彼のグレットヒェン同様にナイイフなものに見出す。

我々は善良なる人達を餘り高く買はない。なぜならば、彼等は群畜なのだから。我々は知つてゐる——如何に最も悪しき、最も邪まなる、最も冷酷なる人間の下に、屢々善良さの此上もなく貴い金の滴がかくされてゐるかといふことを。又如何にそれが甘つたるい魂の、總ての單なる人の善さより優つたものであるかといふことを。

我々是我々の種類に屬する人間を、彼の悪徳によつても、彼の愚かさによつても駁撃されるものと見ない。我々は知つてゐる——我々が認識されにくいといふこと、又我々總てが我々自らに前景を與へるべき理由を有つてゐるといふことを。

## 九四四

何が高貴であるか？——人が絶えず一の役を演じてゐなければならぬといふこと。絶えず身振りを必要とするやうな地位を求めること。大多數者にまで幸福を委ねること。魂の平和から、徳から、和樂から、英吉利的、エンゼルの、スベンサア風に、小商人風に、ちんまりとしてゐることから成立つところの幸福である。本能的に自らの爲めに重い責任を求めること。到處に敵をつくること、仕方のない時には自分自身からすらも敵をつくること。言葉によつてでなく、寧ろ行爲によつて、絶えず大多數者を駁撃すること。

## 九四五

徳は（例へば誠實は）我々の高貴なる、そして危険なる資澤である。我々はそれが齟らすところの損害を斥けてはならぬ。

## 九四六

如何なる賞讃をも受けようとねがはないこと。我々は我々に有用であるところの事を、或は我々を

悦ばすところの事を、或は我々がしなければならぬ事をするのである。

九四七

ある男子に於ける貞潔とは何であるか？ 彼の性的趣味が氣高さを失はないでゐること。色情的な事柄に於て彼が禽獸的なものをも、病的なものをも、惻巧なものをも好まないといふこと。

九四八

「名譽概念」は、「善き社交界」に對する、騎士的性質に對する、絶えず一役を演じてゐなければならぬといふ義務に對する信仰に、その基礎を置いてゐる。本質的に云ふと、人がその生活を餘り眞剣に扱はないこと。あらゆる人々との觸接に於ての最も尊敬すべき行儀作法にまで無條件に執着してゐること（少くとも彼等が「我々」にまで屬してゐない限りは）。同等者等の間に於てのほか、打ちつけても、お人善しになつても、愉快さうにしても、控へ目にしてもゐないといふこと。常にある役を演じてゐるといふこと。

九四九

人が彼の生命を、彼の健康を、彼の名譽を賭するといふことは、慢心の、溢れ出るところの、物惜みせぬ意志の結果である。人類愛からではなく、寧ろ各の大きな危険が我々の力の、我々の勇氣の尺度に關する我々の好奇心を挑發するからである。

九五〇

「驚は眞一文字に跳び懸る。」——魂の氣高さはそれが攻撃する場合の花々しく、昂然たる愚鈍さによつて最も善く認識される。「眞一文字に。」

九五二

「氣高さ」について總ての柔弱な考方に對する戦！ 若干量の禽獸性がその上に具つてゐなければならぬ。犯罪性に近いものがなければならぬこと。『自己満足』は許されない。人は自分自身に對しても冒險的、誘惑的、攪亂者の態度を取つてゐなければならぬ。美しい魂の贅語といふやうな物は何一つ寛假されない。私はより、強壯なる理想に元氣づけてやりたいとねがふ。

九五二

「樂園は剣の影の下にある」——これは又、高貴なる、戦士の起原をもつた魂が、よつて以て自らを暴露し洞見するところの、一の象徴であり合言葉である。

九五三

二の道。——人間が餘剰の力を役立たせる一の時代は来る。科學は性情の奴隸制度を招致することをめざしてゐる。

その時人は、自分自身を何等かの新しきもの、より、高きもの、にまで發展させるべきひまを獲得する。新しき貴族制度。今日生存條件であるところの夥しき徳は、その時跡をたつてゐる。もはや必要でなくなつた諸の性質は、それ故になくなつてしまつてゐる。我々はもはや徳を必要としない。それ故我はそれらの徳を失ひつつあるのである（「一の物が入用である」の徳も、魂の救ひの徳も、また不死の徳も。それらのものは、一の恐ろしく大きな恐怖の情を通してではあるが、人間の巨怪なる自己抑制を可能ならしめる爲め的手段であつた!!!）  
色々な種類の困厄——その訓練によつて人間が形成されるといふやうな困厄。困厄は働いたり、考へたり、自らを制へたりすることを教へる。

\*

生理的の純化と強化と。新しき貴族制度はそれが相手にして戦ふべき一の反對物を必要とする。それは自らを保存する爲めに一の恐るべき逼迫事を有つてゐなければならぬ。

人類の二の未來。(1)凡庸化の歸結。(2)意識されたる高踏、自己形成。

一の間隙をつくるところの教。それは最高の種屬と最低の種屬とを保存する（それは中間の種屬を滅ぼしてしまふ）。

出世間的にも世間的にも、これまでの貴族制度は一の新しき貴族制度の必然性に反するやうな何物をも證據立ててゐない。

5 地上の君臨者等

九五四

或る一の疑問がつねに私に歸つて来る。恐らくは一の誘惑的な氣味悪き疑問が。かくの如き疑問とすべき疑問への權利を有する人々、即ち自分自身を最も善く統御してゐる、今日の最も強き魂にまで言はしめよ——「群畜」の典型が愈々歐羅巴に發展してゐる今日は、正反對な典型の原則的、人工的、

意識的育成と、その典型の徳とに於て試みをなすべき時機ではないだらうか？　そして民主主義運動にとつては、それを利用した——結局奴隷制度のあの新しい、崇高な形成（それが歐羅巴の民主主義の結末であらねばならぬ）のほかに、自らをかゝの奴隷制度の上に置き、自らをそれに執着し、自らをそれによつて引き上げるところの、支配者的、帝王者的精神のあの高き種屬も生れて來るといふことによつて——何者がかやつて來た時、その時こそは一種の標的が、救ひが、辯明理由がはじめて見出されるといふわけではないか？　そしてかの新しく生れたる種屬は新しき、これまで不可能であつたところのものにまで、彼等の展望のはてまで、そして彼等の使命にまで自らを高めて行くであらう。

九五五

今日の歐羅巴人を見ると、私は色々の希望を抱かせられる。一の極度に聰慧なる群畜的集團を土臺にして、そこに一の敢爲なる支配者的種族が造られつつある。前者を教育する爲めの運動がもはや單にそれだけ目立たしくないといふことは明白である。

九五六

群畜の發展を促すところの同じ條件が、指導獸の發展をも促すのである。

九五七

否應なしに、ぐづつき乍ら、運命のごとく恐ろしく、かの大なる課業と問題とが近づいて來る——如何に全體としての此地が統治されるべきであるか？　そして何の爲めに全體としての「人間」が——もはや民族でも種族でもなく——育成され訓練されるべきであるか？

立法的道徳は、一の創造的な深い意志に氣に入るものを、人が人類から形成し得る爲めの主要手段である——最高級の此の如き藝術家意志が勢威をほしいままにし、又立法、宗教、及び道義の形に於て、その創造的意志を久しきに亘つて遂行し得るものとして。此の如き偉大なる創造者の人物を、私の理解する如き本當に偉大なる人間を、今日及び恐らくは當分の間人々は、無益に追ひ求めることであらう。彼等は缺けてゐる。色々の幻滅のあとで、遂に我々が次ぎの事を理解しはじめねばならなくなるまでは。——何故彼等が缺けてゐるかといふこと、又今日の、及び當分の間の彼等の出現及び發展に對し、現在歐羅巴に於て明らかに「道徳」その物と呼ばれてゐるところの物ほど、敵視的の妨害をなしてゐる何ものもないといふことを。あだかも、我々が既に群畜道徳として片附けたところのあれのほか、他に如何なる道徳もなかつたかの如く、あり得なかつたかの如く。それは全力を擧げて地上の普遍的な綠色の牧草的幸福を——即ち安全や、危げなさや、安樂や、暮らし易さを獲ようと努

力するところの、そして最後に、「總てがうまく行くなれば」、あらゆる種類の牧羊者及び先導羊をもなしにすまさうと希望するところのあの道徳である。それが最も汎く説き傳へたところの二の教は、「權利の平等」及び「あらゆる苦惱者に対する同情」である。そして苦惱その物さへ、絶対に脱却されねばならぬ物として、彼等から受取られる。此の如き「觀念」がやはり近代的であり得るといふことは、この近代主義に對して一の悪い概念を抱かせる。だが、何處で、又如何にして人間といふ植物がこれまで最も力強く生ひ立つたかにつき、深く考へて見たところの人は推想せざるを得ない——これが反對な諸條件の下に起つてゐるといふことを。この目的に對して彼の境地の危険性が恐ろしく増大せねばならず、彼の發明力矯飾力が久しき壓迫強制の下に戦ひのぼら(empor kämpfen)ねばならず、彼の生命意志が權力及び優勢への絶對的意志にまで高められねばならぬといふことを。又、危険や、嚴酷や、暴虐や、街上に於ける、並びに胸中に於ける危険や、權利の不平等や、隱密や、ストイイク主義や、誘惑的な藝術や、あらゆる種類の惡魔主義や、一口に云へばあらゆる群畜的理想の反對物が、人間種屬の向上に必要であるといふことを。安樂と凡庸とへの代りに、高處へ人間を育て上げて行かうといふ、かくの如き反對な意圖をもつた道徳は、統治者階級を、未來の地上の君臨者等を育て上げようといふ意圖をもつた道徳は、よく學ばれ得ることの爲めに、現存の道徳律に結びつき、その言葉と體裁との蔽ひの下にむぐり込んで行かなければならぬ。けれども其目的の爲めに色々の過渡的、及びごまかしの手段が

發明されねばならないといふこと、そして一個人の生涯がそんなにも長つたらしい仕事や目的の遂行に關して、殆んど何物をも意味しない故、同一の意志、同一の本能が幾世代を通じて持續を保證されるやうな、一の新らしい種屬が、一の新らしい君臨者的な種屬及び階級が、特に先づ養成されねばならぬといふこと——これは此思想の長たらしい、しかも表白し易くない引續きと、全く同様に明白である。最高の理智性と意志力をもつた或る強い種屬の人間の爲めに、一の價值倒換を準備すること、また此目的から彼等に於て、一群の拘束され誹謗されてゐるところの本能を、徐ろに且つ用心深く釋放してやること、これに就いて深く考へるところの人は、我々自由思想家に屬してゐる——それは勿論、これまでのより新しい種類の「自由思想家」に屬してゐるのである。なぜと云つて、これまでの自由思想家は大抵正反對な事を願望したのだから、これに屬するのは、私の見るところを以てすれば、何よりも先づ歐羅巴の悲觀主義者、叛逆された理想主義の詩人及び思想家である——一般的生存に對する彼等の不満が、更に彼等を現在の人間に對する不満にまで、少くとも論理的に強ひる限りに於て。同じくより、高き人間の特別な權利の爲めに、及び「群畜」を向ふに廻はして戦ひ、そして藝術の誘惑手段で以てより、選ばれたる精神者に於ける總ての群畜的本能及び群畜的願慮をねかしつけてしまふところの、飽くことを知らず野心に燃えてゐる或る藝術家等もさうである。第三に、最後に、舊世界の幸福にはじめられた發見——それは新しいコロンバスの、獨逸精神の仕事である——を元氣よく繼續

するであらう（なぜと云つて、我々は矢張り此征服のはじめの諸段階に立つてゐるのだから）ところの、總てのそれらの批評家及び歴史家等もさうである。けだし舊世界にあつては全くのところ、今日のと異つた、より統治力のある道徳が行はれてゐた。そして古代の人間は、彼の道徳の教育的禁制の下に、今日の人間よりも強く且つ深い人間であつた——今日まで彼のみが「うまく出来た人間」であつた。しかし乍ら、古代より今日に至るまで此の如き「うまく出来た」、換言すれば強く且つ進取の氣に富んだ魂の上に働きかけたところの誘惑は、今日に於ても尙ほ、復興時代に於ての如く、反民主主義的な、反基督教的な一切の物の中、最も手の込んだ、最も効果のあるものなのである。

九五八

私はまだ存在してゐない一の人間種属の爲めに、「地上の君臨者等」の爲めに書いてゐる。

プラトオのテアアゲスに書かれてゐる、「我々の中の誰でもが、出来ればあらゆる人間の支配者に、特に好んで神になりたいとねがふ。」かうした心持は我々の衷こころに回復されなければならぬ。

英吉利人、亞米利加人、及び露西亞人……

九五九

「人間」といふあの原始林植物は、權力についての戦が最も久しくなされてゐたところに、いつでも現れる。偉大な人間等。

原始林黙なる羅馬人等。

九六〇

今よりのち、これまで曾つてそれに比すべき物を見なかつたやうな、より廣大な統治體があるであらう。そしてこれはまだ最も重要な事ではない。一の支配者種族を、將來の「地上の君臨者等」を養成することを自らの任務とするところの、國際的人種同盟の成立が可能にされてゐる——一の新しい、大仕掛けな、最も峻嚴なる自律に土臺を置いた貴族制度である。哲學者の權力人及び藝術家的獨裁者の意志が幾世紀にも亘つて持續されることの出来るやうな貴族制度である。意欲や智識や富や勢力に於ける優勝により、地上の運命を掌中に握る爲め、「人間」に於て藝術家としての自己を形成する爲め、最も宜しきを得た、また最も融通のきく道具として、民主主義的な歐羅巴を利用するであらうところの、一のより、高き種類の人間である。もういい！ 政治についての考方が全然改めらるべき時はもう來かかつてゐるのである。

## 6 偉大なる人間

### 九六一

歴史上の如何なる時期に偉大なる人間等が出現するかについての私の考察。久しきに亘る専制君主的徳の意義。それが弓を折らないならば、それは弓を緊張させる。

### 九六二

偉大なる人間——自然が壮大な様式に於て建造工夫したところの人間——それは何であるか？ 第一には、彼はその一般的行爲の中に一の長い論理を有つてゐるが、その論理はあまりに長い爲め一望の内に収めがたく、従つてあらゆる方へ迷ひ込ませることになる。彼は彼の生涯の全幅を越えて彼の意志を擴充し、又總ての些細な事物その物を輕蔑し排斥する——よし其中に、世の最も美しくして「最も神聖なる」事物があらうとも。第二には、彼はより、冷靜で、より、嚴酷で、より、呑氣で、「輿論」に對してより、無頓着である。彼には「尊敬」と、また尊敬されることと兩立するところの諸の徳が、苟く

も「群畜の徳」に屬するほどの總てのものが缺けてゐる。彼にして引率し得ないならば、彼はただ獨りで行く。その時は、彼と途上に行き會ふ多くの者にまで、彼が不平を鳴らすといふことになる。第三には、彼は如何なる「同情ぶかき」胸をも求めずして、ただ下僕と道具とを求めぬ。彼はいつも、人々を何等かの「もの」にする目的から彼等と交渉してゐる。彼は自らを他に打ち明けがたいと知つてゐる。彼は打ち解けて來るのを悪い趣味だとしてゐる。そして通例彼は、打ち解けてゐると他から思はれてゐる時打ち解けてゐない。彼が自分自身にまで話しかけてゐない時、彼はその假面をかぶつてゐる。彼は眞實を談ることよりも、寧ろ詐ることを欲する。それがより、多くの理智と意志とを必要とするからである。彼の内にあるところの一の寂しさは、賞讃にとつても非難にとつても、手の届かないところの或る物である。なぜと云つて、彼は自分自身の裁判官であつて、他へ訴へることの出来ない地位にゐるのだから。

### 九六三

偉大なる人間は必然に懷疑主義者である（これは彼が懷疑主義者に見えねばならぬといふことを意味しない）——何等かの偉大なるものと、並びにそれへの手段とを意欲するといふこと、その中に偉大さが成立するものであるとしたならば。あらゆる種類の信念からの自由が彼の意志の強さに屬して

ある。乃ち各の大なる欲情が行ふところのあの「明るくされた専制主義」と一致してゐる。此の如き欲情は理智に其御用をつとめさせる。それは非神聖な手段に對する勇氣をさへ有つてゐる。それはためらはず創造する。それはそれ自らに諸の信念を許容する。それはそれらの信念を用ひることをさへやる。けれどもそれはそれらの信念に歸服しない。信仰に對する、及び然りと否とに於ける何等か絶對的なものに對する需要は、弱さの一の證據である。あらゆる弱さが意志の弱さである。信仰をもつた人間は、信心深い人間は、必然にある低劣な種類の人間である。これから出て來る結論は「精神の自由」、即ち本能としての不信仰が、偉大さの豫備條件であるといふことである。

九六四

偉大なる人間は、ある民族に對する彼の權力を感知してゐる。ある民族又はある世紀との彼の一時的一致を意識してゐる。Causa 及び voluntas としての自己意識のかうした擴大が、「利他主義」として誤解される。彼は自らを打ち明ける手段へ驅り立てられる。總ての偉大なる人間は、かくの如き手段を案出工夫することに長じてゐる。彼等は大きな團體の内に自己の委を作り上げようとながふ。彼等は多趣多様なもの、亂脈なものに一の形態を與へようとながふ。混沌を見ることが彼等を刺戟するのである。

愛の誤解。自らを屈し、自らを棄て去るところの一の奴隸的な愛がある。それは理想化して自らを欺瞞する。輕蔑し且つ愛するところの、そして愛人を改造し、向上させるところの、一の神聖な愛がある。偉大さのあの亘怪なるエネルギーを獲得すること——訓練により、又他方では無數の出來損ひの人間の滅却により、將來の人間を作り上げる爲めに。及びその際に生れたところの、まだそれに比すべきものを見ないところの苦惱を見て、破滅してしまはない爲めに！

九六五

民衆の革命や、騷擾や、困厄は、私の考へからすれば、偉大なる個人等の發展に於ける彼等の困厄に比してつまらない物である。我々は自ら欺かれる儘にして置いてはならぬ。總ての斯うした矮小な者等の色々な困厄は、強大なる人間の感情の中に於てのほか、相集まつて全總額をなすに至らない。大なる危険の瞬間に於て自分自身の事を考へ、多數者の災禍から自分の利益を引き出すといふのは、下らない一般人から非常な程度に異つてゐるところの人間の場合に於て、憐憫と正義との感情を統御し得るところの偉大なる性格の一徵證である。

九六六



禽獸と反對に人間は、矛盾した本能及び衝動の夥しくを自分自身の内に發育させてゐる。此綜合によつて彼は地上の君臨者になつてゐる。道德はかうした複雑な衝動世界に於ける局所的な、狭苦しい階級制度——それらの衝動の矛盾によつて人間が破滅しない爲めの——の表現である。かくの如く君臨者なる本能は、その反對本能をすつかり弱くし繊細にしてしまふ——主要本能の活動に對して刺戟を與へるところの衝動として。

最高の人間は本能の最も大きな複雑さを有つてゐるであらう。しかも、彼のやはり堪へ得る比較的最も大きな強さに於て有つてゐるであらう。全くのところ、人間といふ植物が自らを強いものに見えしめてゐる處では、必ず互に力強く反對し合つてゐる本能が見出される(例へばシキスピア)。けれどもそれらの本能はちやんと統御されてゐる。

九六七

總ての大なる人間を惡しき人間の中に數へるのは、當を得たことでないだらうか？ 個人の場合に於てそれを證明するのはあまりたやすくはない。時としては、彼等が隠れんぼの名人であり得たので、彼等は大きな徳の態度及び外觀を取つてゐた。又時としては、彼等は嚴肅に、自分自身に對する熱情的な嚴格さで以て諸の徳を尊敬した。けれどそれは残忍さの結果からである。遠くから見れば、これ

が欺き易いのである。多くの者等は自分自身を間違つて理解した。一の大なる職分が大なる性質を、たとへば正義の如きものを招致することも希れでない。本質的事實はかうだ——偉大なる人々は悉らく偉大なる徳をも有するであらう。だが、その場合にこそは更に反對の徳をも有するであらう。私の思ふには、これらの矛盾の現存から、又其感情からこそ、偉大なる人間、即ち偉大なる緊張をもつた弓門が生じて來るのである。

九六八

偉大なる人間等の中には生活の特殊な屬性が——不正や、欺瞞や、虐使が——最も甚だしい程度に於て見出される。けれども彼等が壓倒的に影響を及ぼした限りに於て、彼等の本質は最もよく誤解され、善き屬性として解釋されてゐる。解釋者としてのカライルのタイプ。(譯者註——彼の「英雄及び英雄崇拜」に於ける、又ゲエテに對する彼の解釋力を想見せよ)。

九六九

一般的に云へば、各の事物は、人がその爲めに拂つたのと丁度同じだけの價值をもつてゐる。勿論これは、個人を孤立さして見る場合に於てはまらない。各個人の大なる能力は、彼自らがその爲めに

なし、犠牲をささげ、忍苦したところの物に對して全然無關係だからである。しかし乍ら人にして若し彼の以前の種族の歴史を吟味して見るならば、そこに彼はあらゆる種類の節制や、奮闘や、勞作や、忍耐による、ある巨怪なる力の蓄積と資本化とを發見するであらう。偉大なる人間がそれだけ多くの費用をかけたからであつて、彼が一の奇蹟の如く、天の賜物及び偶然としてそこに立つてゐるかではない——彼が偉大になつたのは。「遺傳」といふのは一の間違つた概念。ある人間の祖先等は、彼があるところのものの値をつねに拂つて來てゐるのである。

九七〇

謙讓の危険。——我々の力も我々の標的も遮二無二我々の意識へ踏み込んで來てゐない時代に於て、偶然が我々を置くところの職分や、社交や、日常的な仕事の秩序にまで、餘りに夙く自らを順應させるといふことは、斯くして獲られたる餘りにも早熟な良心のたしかさや、精神の爽かさや、他人とのつき合ひよさなぞは、内的及び外的の不安からの脱却として自らの感情に媚びるところの斯うした早手廻した謙讓は、最も危険なる仕方にて於て悪い癖をつけ、悪くしてしまふ。「彼の同等者等」のやり方にならつて尊敬を學ぶこと——あだかも我々自ら價値を決定すべき如何なる尺度及び權利をも我々自らの内に有しなかつたかの如く——更に一の本心でもあるところの、内部的な趣味の聲に反して他

人が評價する如く評價しようとする努力は、一の恐るべき手の込んだ拘束になる。そして結局、愛及び道德のあらゆる繫縛を一邊に粉碎してしまふところの、如何なる爆發もないならば、則ち此の如き精神は萎縮し、矮小になり、柔弱になり、客觀的になつてしまふ。この反對物はかなり悪いけれど、尙ほ且つ右のものよりましである。自分の周囲の爲めに、その賞讃の爲め並びにその非難の爲めに苦むこと、傷つけられたり、膿を有つやうにされたりしながら、それを漏らし示さないでゐること。その愛に對して故意にでなしに、疑深く自らを防衛すること。沈黙を學ぶこと、しかも恐らくは話によつてそれを隠すこと。人が行つて、一時の間息をつき、涙を流し、崇高なる慰めを経験する爲め、他から煩はされない片隅を、寂しい場所を自ら造ること——結局人が「私は君達と何の交渉があるか？」と言ひ、そして自分自身の道を行くべく、十分に強くなつたまで。

九七一

運命であるところの、自らを運んで來るとき運命を運んで來るところの人々は、英雄的な重荷の負擔者の全種族は、おお如何に彼等が一寸でも自分自身から休息することを欲してゐたかよ！如何に彼等が彼等を壓迫するところのものを、切めて數時間でも脱却してゐることの爲め、強い胸と肩とを熱望してゐたかよ！そして如何に無益に彼等が熱望してゐたかよ！……彼等は待つ。彼等は行き過

ざる一切の物を観察する。何人も單に千分の一の苦惱及び欲情を以てすらも彼等の方へやつて來ない。如何なる程度にまで彼等が待つかを、何人も洞見しない……最後に、最後に彼等はその最初の處生上の賢さ——もはや待たないこと——を學び知る。それから間もなく更に第二の賢さを學び知る——温順謙讓にしてゐること、又それから後各の人を堪へ忍び、各の事を堪へ忍ぶこと、一口に云へば、彼等がこれまでに既に堪へ忍んでゐたより、更に少しばかりより多く堪へ忍ぶこと。

## 7 將來の立法者としての最高人

九七二

「將來の立法者。」——久しく且つ無益に「哲學者」といふ言葉に一定した概念を結びつけようと試みたあとで——なぜと云つて私は色々な反對した特徴を見出したから——結局私は、哲學者に二の異なる種類があるといふことを認識した。

- (1) 價值決定の何等かの大なる事態（論理的又は道德的）を意欲するところの哲學者等。
- (2) 斯様な價值決定の立法者であるところの哲學者等。

第一の哲學者等は多様な現象を標徴によつて包括し省略しながら、現存の又は過去の世界を占有しようと試みる。彼等の目的は、これまでの現象を観測し得べき、省察し得べき、理解し得べき、處理し得べきものにあることである。彼等はあらゆる過去の事物を將來の利益になるやうに用ひるといふ、人間の使命に奉仕する。

だが第三の哲學者等は命令者等である。彼等は言ふ、「それは斯くあるべきだ」と。彼等だけが「何處へ」と「何の爲め」とを、人間に有用であるところの有用を決定する。彼等は科學者等の以前の仕事を勝手にする。そしてあらゆる知識は彼等にまで創造の一手段たるに過ぎない。この第二類の哲學者等は減多に現れない。そして全くのところ彼等の地位と危険とは容易ならざるものである。如何に屢屢彼等が故意に眼を閉ぢたかよ——彼等を深潭と没落とから引きはなすところの、狭い空間を見ないでしまふ爲めばかりに。例へばプラトオである。彼は彼の意欲した如き「善」がプラトオの善でなく、むしろ「善その物」であるといふこと、プラトオと呼ばれる或る一人の人間が偶ま彼の途上に見出したに過ぎない永久の寶であるといふことを信じさせられてゐたのである。——かつとより粗惡な形に於て、この同じ盲目への意志が宗教の創始者等の場合にはびこつてゐる。彼等の「汝まさに爲すべし」は全く彼等の耳にまで「我は欲す」の如く響いてはならぬ。たゞある神の命令としてのみ、彼等は彼等の任務を追求することを敢てする。たゞ「啓示」としてのみ、彼等の價值立法は一の堪へ得べ

き重荷である。そして此重荷の下にあるも彼等の良心は押し潰されないのである。

偕てプラトオのそれと、ムハメドのそれと、あの二の慰藉手段が覆されて、そして如何なる思想家もある「神」の、または「永久の價值」の假説によつてもはや其良心を軽くし得ないやうになるや否や、新しき價值に對する立法者の要求は、これまでまだ經驗されたことのない一の新しい恐ろしさにまで高められる。此の如き義務の豫覺が明るくなり始めてゐるところのそれらの選抜された者は今、それを彼等の最大の危険としての如く、まだ「宜しき時に於て」、何等かの横跳しによつて脱却し得られたのではないかどうかを試して見るであらう。例へば彼等は自分自身に説き聞かして見るのである——任務は既に果されてゐるといふこと、或はそれが果され得ないものだといふこと、或は彼等が此の如き重荷を負ふに足るやうな如何なる肩をも有しないといふこと、或は彼等が既に他の、より近い任務を負はされてゐるといふこと、或は加之此新しい遠い義務が一の試練誘惑であり、あらゆる義務からそらすものであり、一の病氣であり、一種の亂心であるといふことを。實際のところ、多くの人々の上に回避が成功するかも知れない。歴史の全體を一貫して我々は此の如き回避者及び其良心のやましさを痕跡を見る。だが太抵の場合、此の如き宿命の人々にまであの救済の時が来る。彼等が「しようと思ひ」もしなかつたところの事をしなければならぬ、あの秋の成熟時が来る。そして前には彼等の最も恐れてゐたところの行爲が、彼等にまで不隨意的行爲の如く、殆んど贈物の如く、た

やすく且つ求められずして木から落ちて来る。

## 九七三

人間的眼界。——哲學者等は、如何なる程度にまで人間が自らを<sup>持</sup>上げ得るかを試験することに、極度の努力をなすところの者として考へられてよい。この事は特にプラトオに就いて云へる——如何なる程度にまで彼の力が到達してゐるか。だが哲學者等はそれを個體として爲すのである。恐らくは帝王等や國家建設者等の本能がより大きかつたであらう。なぜと云つて彼等は、如何なる程度にまで人間が発達に於て、又「有利なる事情」の下に押し進められ得るかを考へるからである。だが彼等は何が有利なる事情であるかを十分に理解しない。何處にこれまで「人間」といふ植物が最も立派に成長したかは大きな問題だ。これに對しては、歴史の比較的研究が必要である。

## 九七四

ある事實、ある仕事は人間の各の時代及び各の新しい種類に對して新しい雄辯力を働かせる。

## 九七五

ある思想を遂行する際に、客観的で、刻薄で、堅固で、峻厳であることを失はないといふのは、藝術家等にとつて最善の強みである。しかし人がその爲めに人間的材料を必要とするならば（教師、政治家などの如く）、則ち安息と冷靜と嚴酷とは直ちに消え去つてしまふ。シイザアやナポレオンの如き性格に於て我々は、彼等の大理石に對する「無關心な」勞作のあるものを洞見することが出来る——その場合犠牲にされた人々の數がどれだけであつたらうとも。この方向に最高人の將來はある。最大の責任を負ひながら、しかもその爲めに破滅しないこと。これまでは、自分自身の權利と自分自身の手とに對する信仰を失はない爲めには、インスピレーションの欺瞞が殆んどつねに必要であつた。

## 九七六

哲學者が滅多に成功しない所以。彼の諸の條件の中には、通例他の人間を破滅させるところの諸の性質がある——

- (1) 性質の恐ろしき複雑さ。彼は人間の、あらゆる彼の高き低き欲望の省略であらねばならぬ。自己撞着の、又自己に對する嘔吐感の危険。
- (2) 彼は最もさまざまなる方面に對して好奇的であらねばならぬ。分裂の危険。
- (3) 彼は最高の意味に於て、正義であり且つ公平であらねばならぬ。けれども又、愛、憎しみ（及

び不正）の中にも深入りしてあらねばならぬ。

- (4) 彼は單なる傍觀者であるのみならず、立法者でもあらねばならぬ。審く者にして、しかも審かれる者と（彼が世界の省略である限りに於て）。

- (5) 極度に多様であつて、しかも尙ほ堅實嚴酷。しなやかさ。

## 九七七

哲學者の本當に王者的な職分は（アングロサクソン人アルクイインの表現に従へば）—— *Prava corrigere, et recta corroborare, et sancta sublimare.*（誤謬を正し、正當なることを力説し、また神聖なる諸の事物を一層崇高ならしむること）。

## 九七八

新しき哲學者は一の支配者階級との結合に於てのみ、その最高の精神化として出現し得るのである。直接の地上統治といふ大政策。その爲めには主義の完全なる缺乏が必要。

## 九七九

根本觀念。新しい價値が先づ創造されねばならぬ——それは我々の義務にされないではゐない！  
哲學者は我々にとつての立法者であらねばならぬ。新しき諸種屬。(如何にしてこれまで最高の種屬——例へば希臘人——は養成されてゐたか。かうした種類の「偶發事」を意識的に意欲すること)。

九八〇

孤獨なる高處より見下ろしながら、幾世代もの長い聯鎖を自分自身の方へ引き上げるに足りるほど強大な偉大な教育者として哲學者を考へるとせよ、我々は彼に偉大な教育者の氣味惡き特權をも承認してやらねばならないであらう。教育者は何を彼自らが考へてゐるかを決して言はない。寧ろつねにたゞ、彼が教育する者等の利益になるやうにとて、ある事柄について考へるところのものをのみ言ふ。この矯飾に於て彼は見透されてはならぬ。人々をして、彼の正直さを信ぜしめるのは、彼の名人性に屬することである。彼は訓練及び教育のあらゆる手段に能力を有つてゐなければならぬ。多くの性格を彼は、たゞ侮蔑の鞭打によつてのみ前進させる。他の性格を、怠惰なもの、不決斷なもの、臆病なもの、虚榮心の強いものなどを、恐らくは誇張された賞讃で以て前進させるであらう。かくの如き教育者は善惡を超越してゐる。けれども何人もそれを知つてはならぬ。

九八一

人々を「より善く」しないこと、何等かの仕方にて彼等にまで道德を談らないこと——あだかも「道德その物」が、或は一般に一の理想的な種類の人間が與へられてゐたかの如く。寧ろより強い人が必要とされるやうな情況、彼等の方で人々を強くする一の道德(より明白に云へば、一の肉體的精神的訓練)を必要とし、従つて有つであらうやうな情況を造ること！

青い目や高まつた胸によつて誘惑されるのを其儘にして置かないこと。魂の偉大さは何等の浪漫的なもの自體を有しない。そして生憎と何等の愛すべきものをすらも有しない！

九八二

我々は戰士等からして學ばねばならぬ。(1)死を我々の戦ひの目的であるところの興味に結びつけること。それが我々を尊敬を値したものにする。(2)我々は多くの者を犠牲にすることを學ばねばならぬ。そしてその人間等を惜まない爲めに、我々の事由を十分嚴肅に取ること。(3)峻嚴なる訓練を、そして戦に於て暴行と奸計とを我等自らに許すことを。

九八三

温情や憐憫をも支配すべきあの支配者的な徳を養はしめる教育。あの大きな訓練的なる徳（これに對して「汝の敵を救せ」は兇賊である）を、創造者の欲情を高處にまで引き上げること——もはや大理石を刻まないこと！ それらの生物の例外的な、強大な地位（これまでの君主等に比較して）、基督の魂に比較された羅馬の皇帝。

九八四

魂の偉大さを理智の偉大さから分離しないこと。なぜと云つて前者は不羈獨立を包有してゐるから。けれども理智の偉大さなしには不羈獨立が許されない。魂の偉大さは善行慾や「正義」の實行によつてすらも矢張り災厄を招致する。低劣な理智は服従しなければならぬ。従つて偉大さを有ち得ないものである。

九八五

孤獨にゐたいとねがふ故にでなく、寧ろ同等者を見出さないやうな或る物である故に、寂寥に圍繞

されてゐるところのより、高き哲學的な人間。如何なる危険と新しき苦しみとが丁度今日彼の爲めに残し置かれてあるかよ——我々が階級制度に對する信仰をなくし、従つて此寂寥を尊敬したり理解したりすることを知らないやうになつてゐる丁度今日に於て！ 従前賢者は殆んど群衆の良心に對する此の如き回避によつて自らを神聖にした。今日隣通者は暗鬱な懷疑及び猜疑の雲に包まれてゐるかのやうに自らを見る。そして嫉妬深い者やみじめな者等の側からばかりでない。彼は彼の經驗する各の温情に於て、穿き違ひや、なげやりや、淺薄さを見出さなければならぬ。彼はより、安易な地位だとか、より、秩序の立つた、より、信賴すべき社會だとかにより、それらの人々が彼を彼自身から「救」はうと試みる時、彼等自らを善く且つ神聖なものに感ずるところの、狹隘な憐憫のあの奸策を知つてゐる。否、彼は總ての精神の凡庸なる者等が彼に反抗して立ち、しかもさうする事の彼等の權利を信じ切つてゐる時の、あの無意識の破壊衝動を嘆賞しなければならぬであらう！ この不可思議な寂寥の人人にとつては、外部的な、空間的な、孤獨の外套の中にも、しつかり、自らを包んでゐるといふことが必要である。これは彼等の精巧さに屬してゐる。此の如き人間が今日、押し流し行く、危険なる時代の急流の間にあつて、自らを保持し、自らを押し立て、行く爲めには、奸計と假裝とすらも必要である。現在の中に、現在に對して自らを支へて行く爲めの各の試みを、これらの人間及び彼等の近代的標的への各の近接を、彼は彼の本當の罪惡の如く贖はねばならぬ。そして彼は、あらゆる此の如き試みの

あとで直ぐ、病氣やよくない出来事によつて、再び彼を彼自らにまで連れもどすところの、彼の本性のかくれたる賢さを驚嘆するかも知らないのである。」

九八六

„—Maledetto colui

che contrista un spirito immortal!”

(不死なる精神を悲ませるところのものは呪はれてあれ！)

Manzoni (Conte di Carnagnola, Act II.)

九八七

人間の最も困難な、そして最も高い形像は、最も稀れに成功する。かくて哲學の歴史は夥しきにすぎる失敗の、不幸の場合と、極度に緩漫なる進歩とを示してゐる。幾世紀の全部が成し遂げられたところの物の間にはいり込んだり、それを押し付けたりする。聯絡がいつもいなくなつてしまふ。これは一の恐るべき歴史である——最高人の、賢者の歴史は、最も傷害されてゐるのは偉大な者等の記憶である。なぜと云つて、半出來の、及び出來損ひの連中が彼等を誤解し、「成功」によつて彼等に打ち

勝つからである。「効果」の示される度毎に、賤民の團衆は舞臺に現れる。そして矮小な者等と精神の貴しい者等との談合をきくのは、人類の運命がその最高典型の成功にあることを知つて戦慄するところの人々にとつて、一の恐るべき耳の拷問苦である。幼小の頃からして私は、賢者の生存條件について深く考へた。そして彼が今歐羅巴に於て再び可能になる——恐らくはたゞ短い時間だけ——といふ、私の悦ばしき信念を包みかくさないであらう。

九八八

この新しい哲學者等は、彼等は人間の事實上階級制度及び價値の差等の表現で以てはじめる。彼等は、悲しいかな、一の近似、一の均一化の正反對を意欲する。彼等はあらゆる意味に異つた物にすることを教へる。彼等はまた會つてなかつたやうな間隙を拵へさせる。彼等は人間がこれまでよりも邪惡であつたことを意欲する。當分のところ彼等はお互ひからも縁遠く包み隠されて生きてゐる。色々の理由からして彼等には、隠遁者であることが、及び假面をかぶることすらもが必要であらう。従つて彼等は彼等の同等者を捜し求めることに役立たないであらう。彼等は孤獨にして住み、恐らくあらゆる七の寂しさの苦しみを知るであらう。だが彼等にして若し、偶然によつて途上に相會ふならば、私は彼等が互に見そこなひ、または相手を欺き合ふであらうことを保證する上に賭物カウチをしてよい。



九八九

Les philosophes ne sont pass faits pour s'almer. Les aigles ne voient point en compagnie. Il faut laisser cela aux perdrix, aux étourneaux..... Planer au-dessus et avoir des griffes, voilà le lot des grands génies.

Galliani.

(哲學者等は互に愛し合ふやうに造られてゐない。鷲は連立つて飛ばない。我々はそれを鷹鴞や椋鳥にまで委して置かなければならぬ……空高く翔ること、及び利き爪を有つこと、これが大なる天才者の運命である——ガリアニ)。

九九〇

私は言ふことを忘れた——此の如き哲學者等が快活であるといふこと、また彼等が一の完全に明るい天の深潭に坐するを好むといふことを。彼等は生活を堪へる爲めに、他の人々と異つた手段を必要とする。なぜと云つて、彼等は異つた苦しみ方をするのだから(精しく云へば、彼等の人間愛に依つてと丁度同じだけ、彼等の人間侮蔑の深さによつて苦むのだから)。地上の最も多く苦み悩んだところの生物は發明した——笑を。

九九一

「快活」に對する誤解について。——久しい緊張からの一時的釋放。久しき、且つ恐るべき決斷に自らをささげ、自らを準備するところの一の精神の慢心であり、ザテュルン祭である。「科學」の形をとれる「痴人。」

九九二

諸の精神の間なる新しき階級制度。悲劇的性格がもはや先頭に立たない。

九九三

人間的低劣の蒸發氣及び汚物の上に、一のより高い、より朗らかな人間性のあるといふこと、それが數から云へばまことに小さな物である(なぜと云つて、卓立するところの一切の物が、その本質上稀有であるからだ)といふことを知るのは、私にとつて一の慰めである。人がその種族に屬するのは、下の人々より天分が多いとか、徳があるとか、勇者的であるとか、愛情深いとか云ふことの爲めでない。寧ろ、より冷かで、より朗らかで、より遠望的で、より寂寥であるからである。寂寥を幸福とし

て、特權として、否生存の條件として堪へ忍び、選り取り、要求するからである。同等者等の間に生きる如くして、雲や電光の間に生き、また同じく日光や、露の滴や、雪片や、そして總ての物——必然に高處から來るところの、また自らを動かす時、永久にただ上から下の方向にのみ自らを動かすところの總ての物の間に生きるからである。高處への憧憬は我々の物でない。勇者等、殉教者等、天才者等、及び熱狂者等は我々にまで、十分に靜かな、辛抱強い、こまやかな、冷かな、ゆつくりしたものでない。

九九四

絶對的信念——上の價值感情と下の價值感情とは異つてゐるといふこと。無數の經驗が後者に缺けてゐるといふこと。下から上へには誤解が必然的であるといふこと。

九九五

如何にして人間は一の大なる力へ、また一の大なる任務へ來るか？ 肉體の上の、また靈魂の上のあらゆる徳及び堪能さは、勞苦して、また少し宛獲得される——色々の勤勉さや、自制や、僅少な物への限局によつて、同じ勞働や同じあきらめの色々な粘り強い、誠實な反復によつて。けれども其處

には、徳及び堪能さに於ける此徐々に獲得されたる様々な富の、相續者であり、又君臨者であるところの人々がある。なぜならば、幸福な、理性にかなつた結婚と、更に幸福な出來事によつて、多くの世代の獲得集積されたる力は浪費され蕩盡されることの代りに、一のしつかりした奮闘及び意志によつて結集されてゐる。乃ち結局、一人の人間が、怪物的な仕事を願望するところの力の怪物が現れる。なぜと云つて、我々を統治するのは我々の力であるから。そして標的や、意圖や動機のみじめなる理智的遊戯はただ前景たるにすぎない——如何に多く弱い目がこれらの事物に於ける肝要事を見得るにもせよ。

九九六

崇高なる人間は、彼が全く華車で弱々しい時にさへも、最高の價值を有つてゐる。なぜならば、まことに困難な、そして希れなる事物の夥しい數が、多くの世代を通して育成され、彼の中に一にされて保存されてゐるからである。

九九七

私は教へる——そこにはより、高き人間と、より、低き人間とがある。そしてある一個人は一定の事情

の下に數千年間の爲めにその存在を理由づけてやるかも知れない。即ちそれは無数の不完全な断片人に比較して、より充實した、より豊富な、より偉大な、より完全な人間である。

九九八

統治者等のかなたに、あらゆる拘束から放たれて、最高人等は生きてゐる。そして統治者等の中に彼等は彼等の道具を有つてゐる。

九九九

階級制度。價值を決定し、數千年間の意志を導くところの、そして最高の性格者等を導くことによつてそれを爲すところの者は、それは最高人である。

一〇〇〇

私は最高人の魂の底に何等かの物を看破したと思つてゐる。恐らくは、彼を看破したところの各の者は破滅するであらう。しかし乍ら、彼を見たところの者は、彼を可能にする爲め助力しなければならぬ。

根本思想。我々は將來をあらゆる我々の評價に對する尺度として取らねばならぬ。そして我々の後に我々の行爲の律法を求めてはならぬ。

一〇〇一

「人類」ではなく、寧ろ超人が標的である。

一〇〇二

Come l'uom s'eterna.....—Inf, XV, 85.

## II デイオニゾス

### 1003

大自然の成功作であるところの、私の心情をよろこばしてくれるところの、硬く、やさしく、且つ香はしき木材から刻み上げられたところの、私の鼻さへもその悦びを有たしてもらへるところの人、その人にまでこの書はささげられてあれ。

彼には彼のためになる物が旨い。

何物かに對する彼の悦樂は、有用の尺度が踏み超えられるときやまつてしまふ。

彼は諸の部分的傷害に對する藥劑を洞見する。彼の病氣は彼の生活の大なる刺戟物である。

彼は彼のよからぬ出来事をも利用することを知つてゐる。

彼は彼を滅ぼしさうに見えるところの災禍によつて一層強くなる。

彼は彼が見、聞き、體驗するところの一切の物から、彼の肝要事に役立つものを本能的に蒐集する。

彼は一の選擇原理に従ふ。彼は多くの物を棄て去る。

彼は久しい間の細心と心掛けられたる自尊とが育て上げたところの落着きで以て反動する。彼は刺戟が何處から來るか、何處へ行くかを吟味する。彼は屈服しない。

彼は書物とつき合ふか、人間とつき合ふか、それとも風景とつき合ふか、とにかくつねに彼自らの社交範圍の内にある。

彼は選擇しながら、打ち委せながら、信頼しながら尊敬する。

### 1004

如何に一切の物が、さうあるべきやうに實際にも起るかといふこと、如何にあらゆる種類の「不完全さ」とそれから來る苦惱とが、極度にも願はしき一切の物に屬してゐるかといふこと、それを理解し得る位の、高い考察點に我々は到達すべきである。

### 1005

一八七六年に近く私は一の恐怖を経験した——ワグネルが今何を追ふてゐたかを理解した時、私のそれまでの意欲全部が曝らし出されてゐるのを見て。そして私は深くも一致した要求のあらゆる結

により、感謝の念により、私が私のまのあたりに見たところの補ひがたさと絶對的な缺陷とにより、彼にまでしつかりと結びつけられた。

丁度此頃私は私の文献學及び教師生活へ釋放されがたく閉ぢ込められてゐるやうに思つた——私の生涯のある偶發事及び應急策に於て。私は如何にして脱れ出づべきかを知らなかつた。そして疲れさせられ、使ひへらされ、役に立たなくなつてゐた。

丁度此頃私は、私の本能がシ・オペンハウエルのと丁度正反對な物を意欲してゐたことを理解した。即ち、人生の最も恐るべきもの、最も曖昧なもの、最も虚偽なものの場合にすらも、それを正當に理由づけることである。この目的から私は「*Dei*・*Optimo*・*Maximo*」といふ方式を手にしてゐた。

「本體」を意志とするシ・オペンハウエルの解釋は、「事物の本體」が必然に善であり、祝福されたものであり、眞實であり、一であらねばならぬといふこととの概念の方へ、本質的な一步を進めたものにはかならなかつた。但だ彼はこの意志を神化することを理會しなかつた。彼は道徳的基督教的理想に引つかつた儘でゐた。全くのところシ・オペンハウエルはまだ随分基督教の價値の支配下に留まつてゐたので、物その物がもはや「神」でなくなつたあとでは、それを劣惡な、愚鈍な、絶對に排斥すべきものに見なければならなかつた位である。異つたものであり得ることには、神であり得ることすらも、無限の方法のあり得べきを彼は理解しなかつたのである。

## 1006

道徳的價値がこれまででは最上の價値であつた。誰かがこの事を疑ふだらうか？……我々にして若し此價値をその臺座から引き下ろすならば、則ち我々はあらゆる價値を變更してしまふのである。それのこれまでの階級制度の原理は、斯くして顛覆されてしまふのである。

## 1007

價値を評價し直すといふこと、これは何を意味してゐるか？ 總ての自發的運動は、總ての新しき、將來の、より、強き運動は存在してゐなければならぬ。ただそれは、その名稱と評價との下に現れる。そしてまだそれ自らを意識されるやうになつてゐないのである。

意識的になり、そして到達されたものに然りを言ふことの勇氣を有つこと。我々の新に到達した最も善き物、最も強き物に對して、我々をふさはしからぬ人間にしてしまふところの、舊い評價の年中行事から脱却すること。

## 1008

既に一切の物を、集積された力の上に、爆發物の上に置いて準備されたのでないやうな、各の教が不用の教である。一の價值倒換が到達されるのは、新しい要求の緊張が、意識するには至らないけれど、兎に角舊價值によつて苦み悩むところの新しく窮乏してゐる者等の緊張がある場合だけである。

## 1009

私の價值に對する視點。豊饒からか、それとも願望からか？……人は傍觀者か、それとも當事者か？ 目をそらすのか、それともわきへそれて行くのか？ 集積された力の結果として、『自發的』に働くのか、それとも單に反動的に挑發され刺戟されるのか？ 單に諸要素の少さから働くのか、それとも、支配力が必要とすればその役に立たせると云ふほど、色々の要素に對するそれほどの壓倒的な支配力から働くのか？ 人は問題か、それとも解決か？ 仕事のけち臭さによつて完全であるか、それとも一の標的の異常さによつて不完全であるか？ 人は純粹であるか、それとも俳優であるに過ぎないか？ 人は俳優として純粹であるか、それとも俳優の<sup>せゐ</sup>ものであるに過ぎないか？ 人は代表者であるか、それとも代表された者その物であるか？ 「人格」か、それとも諸人格の集合に過ぎないか？ 病氣に悩んでゐるか、それとも過剰の健康に悩んでゐるか？ 牧羊者として導くか、それとも「例外者」として導くか（今一つ、それとも亡命として導くか）？ 人は品位を必要とするか、それとも「道

化役」を演ずることを必要とするか？ 人は抵抗を求めるか、それとも抵抗を避けるか？ 人は「餘りに早すぎる」ものとして不完全であるか、それとも「餘りに晩すぎる」ものとして不完全であるか？ 人の本性は然りを言ふか、それとも否を言ふか、それとも多彩な物を取り集めた孔雀の尻尾であるか？ 人は自らの浮誇をも恥ぢない位に高慢であるか？ 人はまだ良心の苛責を必要としてゐるか（かうした種屬は希れになつて來る。従前は良心があまりに屢々苛責しなければならなかつた。今はもうそれをなすに足るほどの齒を有つてゐないではないか）？ 人はまだ一の義務に對して能力を有つてゐるか？（そこには、その義務を奪はれるとき、その生の悦びの残りを悉く奪はれてしまふやうな人々がある——これは取り分け女性的な人々、臣屬的に生れついてゐる人々について云はれることである）。

## 1010

世界についての我々の通例の考方が誤解であつたとしたら、此の如き誤解すらもその限界内では是認されるといふやうな、一の完全さがよく考へ得られたであらうか？

一の新しい完全さの概念。我々の論理に、我々の「美」に、我々の「善」に我々の「眞」に相應しないところの物が、我々の理想その物があるより、一層高い意味にすらも完全であつたかも知れない。

1011

我々の大なる謙虚。知られざるものを神化しないこと。我々はほんの僅かを知りはじめたばかりのところだ。間違つた、浪費された努力。

我々の『新しい世界』。我々は、如何なる程度にまで我々が我々の價值感情の創造者であるかを認識しなければならぬ。かくして歴史に『意義』を置くことが出来る。

眞實に對する此信仰は我々の内に其最終の歸結へ到達する。諸君はそれがどう云ふ文句であるかを知つてゐる。即ち苟くも禮拜さるべき何物かがあるならば、禮拜されざるを得ないのは外観であるといふこと、神聖なのは虚偽であつて、眞實でないといふこと！

1012

合理性を押しすすめるところの人は、それと共に反對の力をも——あらゆる種類の神祕主義や愚鈍さをも——新しき力へ追ひやるのである。

我々は各の運動に於て差別しなければならぬ——(1)一部分はそれが前の運動から來る疲勞(その飽滿、それに対する弱さの悪意、及び病氣)であるといふこと、(2)一部分はそれが一の新しく目覺めた、

久しく眠つてゐた、蓄積されてゐた力であり、従つて陽氣な、高慢な、亂暴な、強健なものであるといふことを。

1013

強健と病弱と。我々をして細心であらしめよ！標準はやはり身體の花盛りと、精神の跳躍力、勇氣及び快活さである。だが、勿論また、病的なもの如何に多くを人が堪へ忍び、そして打ち克ち得ることぞ、健康なものになし得ることぞ！より、華車な人々を破滅させるであらうやうなものが、大なる健康への刺戟的手段に屬してゐる。

1014

それは單に力の問題である——世紀のあらゆる病的特徴を有しながら、一の豐饒な、造形的な、回復的な力によつてそれを埋合はしてしまふのは、強い人間。

1015

十九世紀の強さについて。——我々は十八世紀よりも以上に中世的である。單に異つたもの、珍ら

しいものに對して、より、好奇的であり、またはより、興奮し易いといふだけではない。我々は革命に對して革命を起してゐる……我々は十八世紀の幽霊であるところの、理性に對する恐怖から我々自らを自由にしてゐる。我々は再び思ひ切つて不條理に、子供らしく、抒情詩的であらうとする。一口に云へば、『我々は音楽者である』。我々は不條理なものを恐れないと同じやうに滑稽なものを恐れない。悪魔は彼に都合よく神が寛容であることを見出す。といふよりも寧ろ、彼は幾時代もの間を誤解され誹謗されて來た者として興味を惹いてゐる。我々は悪魔の名譽の救主である。

我々にはもはや偉大なものを恐るべきものから引き離さない。我々は善なる事物をその複雑さに於て、最悪の事物と合一させる。我々は従前の不條理なる『理想』(悪の増大を來すことなしに善を増大させることを要求したところの)に打ち克つた。復興期に特有な、理想の前の臆病さは減退してゐる。我々は思ひ切つて復興期の道徳をさへ憧憬する。僧侶と教會とに對する確執は同時に結末へ來てゐる。『神を信ずるのは不道徳である』——だが、これこそは我々にまで、この信仰を辯明する最善の形式と見なされる。

かうした總ての物に關して我々は、我々自らの内に權利を承認してゐる。我々は『善なる事物』の反面に對して恐怖しない(我々はそれを求める。我々はそれを爲すに足るほど勇敢にして、且つ好奇的である)——例へば古代希臘の事物に於て、道徳に於て、理性に於て、善き趣味に於て(我々は總ての此の如き貴重品で以て受けるところの損失を追算する。我々は此の如き貴重品で以て殆んど我々自身を貧しくしてしまふ)。我々は更に、悪しき事物の反面を我々自身にかくすこともしないのである。

## 1016

我々に名譽となるところのもの。——何等かの物が我々に名譽となるならば、それは斯うだ。我々は我々の嚴肅さを他の事物へ移してゐる。我々は總ての時代から輕蔑され、斥けられてゐた低劣な事物を重要視する。他方では我々は『美しい感情』を廉價に手放してしまふのである。

そもそも肉體の輕蔑より危険なる心得違ひと云ふものがあり得るか？ あだかも、それと共に理智性の全部が病的になることへ、『理想主義』の vapours へ片附けられてしまはなかつたかのごとく！ 基督者及び理想家等から考へ出されたところの總ての物が、手をも足をも有しない。我々は何となく徹底的である。我々は『最小の世界』を普遍的に決定するところのものとして發見してゐる。

街の敷石、室内の善き空氣、その價値に従つて理解されたる食物。我々は生存のあらゆる必需品を眞面目に評價し、そしてあらゆる『美しい魂的なもの』を一種の『浮はつ調子』として輕蔑する。これまで最も輕蔑されてゐたところのものが第一線に押し立てられてゐる。

すべて頭に來てはつた。



## 1017

ルソオの「自然人」の代りに、十九世紀は「人間」に對する一のより、眞實な形像を發見してゐる。十九世紀はそれを爲すだけの勇氣をもつてゐた……一體に、それと共に「人間」といふ基督教的概念が幾分か回復されてゐる。我々が勇氣をもたなかつたのは、丁度この「人間その物」を是認し、彼の中に人類の未來の保證を見るときに於てである。同様に思ひ切つて我々は、人間性の恐るべき方面の成長を文化のあらゆる進歩に伴ふ現象として理解することをしなかつた。この點に於て我々は矢張り基督教的理想に臣屬して居り、その味方として異教主義に對抗し、また *renaissance* といふ復興期的概念に對抗して居る。しかし乍ら文化の鍵はかくして見出さるべきでない。そして實地にも歴史の諸の質造は「善き人間」に都合よく行つてゐる（あだかも彼だけが人間の進歩であるかの如く）。又社會主義的理想（即ち、非基督教的にされた世界に於ける基督教及びルソオの殘物）に都合よく行つてゐる。

十八世紀に對する戰。ゲエテ及びナポレオンによる其最高の克服。シ、オベンハウエルも同一物に對して戰ふ。だが彼は知らず知らず十七世紀へ引き返す。彼は基督教のないパスカルの價值判斷をもつた、一の近代的なパスカルである。シ、オベンハウエルは一の新しき「然り」を創造すべく十分に強

くなかつたのである。

ナポレオン。より、高き人間とより、恐るべき人間との間なる必然的關係が理解される。「男子」が回復されてゐる。婦人へは輕蔑と恐怖との債務的納貢が取返されてゐる。健康及び最高の活動性としての「全體性」。直線が、大なる様式が行爲の中に再び發見されてゐる。最も強大なる本能が、生命その物の本能が、支配欲が肯定されてゐる。

## 1018

(Revue des mondes, 15. Febr. 1887. ナポレオンについてのテヘヌ)。「名匠的能力が突如として現れる。政治家の中に包みかくされてゐた藝術家が鞘から出て來る。彼は理想的なもの及び不可能ものの範圍に於て創造する。彼は今一度、彼があるところのものとして認識される——ダンテの、またミケランゼロの遺弟。そして實際、彼の幻像のしつかりした輪廓や、彼の夢想の強さ、聯絡、及び内的論理や、彼の默想の深さや、彼の構想の超人的偉大さに於て、彼は彼等に等しいのである。son génie a la même taille et la même structure; il est un des trois esprits souverains de la renaissance italienne. (彼の天才は同一の組織及び構造をもつてゐる。彼は伊太利復興期に於ける三の主權者的精神の「やあやあ」)

注意——ダンテ、ミケランゼロ、ナポレオン。

## 一〇一九

「強さの悲観主義について。」——原始人の魂の内的經濟に於ては、邪惡に對する恐怖が優勢である。邪惡とは何であるか？ 偶然なるものと、不確實なるものと、突然なるものとの三通りである。如何にして原始人は邪惡と戦ふか？ 彼はそれを理性として、權力として考へ、人格としてすらも考へる。これに依つて彼は彼等と一種の條約を取結ぶこと、また一般に前以て彼等を始末すること——先手を打つことの可能性を獲るのである。

今一つの方策は、其邪惡と有害とを外觀にすぎないと主張するのである。偶然事の、不確實なるものの、突然なるものの結果は、善意あるものとして、道理にかなつたものとして解釋されてゐる。

第三の方策は、惡を特に「價值相應」なものとして解釋するのである。即ち邪惡は刑罰として辯明されるのである。

これを要するに、人々はそれに屈從するのである。道德的宗教的解釋全部が邪惡への屈從の一形式たるに過ぎない。邪惡の中に善意があるといふ信仰は、それとの戦ひに對するあきらめを意味してゐる。今文化のあらゆる歴史が偶然的なものに對する、不確實なものに對する、突然なものに對するあの、

恐怖の減退を表白してゐる。文化は嚴密に、計量することを學び、原因を考へ出すことを學び、先廻りすることを學び、必然性を信ずることを學ぶの謂ひである。文化の成長につれて人間にまで、邪惡への屈從のあの原始的形式（宗教、または道德と呼ばれたる）は、あの「邪惡の爲めの辯明」はなくて済まされるものになる。今彼は「邪惡」に對して戦をする。彼はそれを廢棄してしまふ。然り、安全感情の、法則及び計量可能に對する信仰の情態が可能になり、そして其情態の中では、それらの物が面倒なものとして意識にはいり、偶然的なものに對する、不確實なものに對する、突然なものに對する悦樂が刺戟物として現れる。

我々をして最高文化のこの徴候の前に一瞬の間を停まらしめよ。私はそれを強さの悲観主義と名づける。人間は今や「邪惡の爲めの辯明」を要しない。「辯明すること」こそ彼の恐れるところのものである。彼は純粹の、生の邪惡を享樂する。彼は無目的な邪惡を最も興味あるものに見出す。彼にして若し前に一人の神を必要としてゐたならば、今や彼を狂喜せしむるものは神のない世界的無秩序であり、恐るべきものや、曖昧なものや、誘惑的なのが本質をなすところの一の偶然性の世界である。此の如き情態に於ては、善こそ「辯明されること」を必要とした。即ち、それは一の邪惡な、そして危険な基底を有つてゐるか、一の大なる愚鈍さをそれ自らの内に包有してゐるかでなければならぬ。その場合にも尙ほ且つそれは悅樂させる。動物性は今や恐怖心を起させない。人間の中なる禽獸に都

合よき、一の才氣ある、そして幸福なる自負心は、此の如き時代に於て、理智性の最も勝ち誇つた形式である。今や人間は神に對する信仰を恥ぢ得べく、十分に強くなつてゐる。彼は今新しく悪魔の辯護者の役を演ずることが出来る。實際に彼が若し徳を維持すると稱するならば、彼は徳の中に一の巧慧を、狡猾を、收得慾を、權力慾を認識せしめるところの、それらの理由の爲めにそれをなすのであらう。この強さの悲觀主義も一の辯神論に、即ち世界への絶對的肯定に結末する（だが、それは人が會つて世界へ否を言つた場合のそれと、同一の理由からである）。そしてかくの如く、この世界を實際に到達されたる最高の理想として考へることに終結するのである。

## I O I O

悲觀主義の主要なる種類——

敏感性の悲觀主義（不快感の優勢に對する過度の苛立たしさ）。

『不自由意志』の悲觀主義（言ひ換へれば、刺戟に對する抵抗力の缺乏）。

疑惑の悲觀主義（總ての固定的なものに對する、總ての捕捉及び接觸に對する内氣、臆病さ）。これらのものに屬する心理状態は、いづれも皆癡狂院に於て觀察される——幾分誇張された形に於てではあるが。『虛無主義』（『虛無』に對する穿實的感情）についても同じ事が云はれる。

しかし乍らパスカルの道德的悲觀主義は何に屬するか？ エダンタ哲學の形而上學的悲觀主義は何に屬するか？ 無政府主義者（シェリーの如き）の社會的悲觀主義は何に屬するか？ 同情悲觀主義（レオ・トルストイや、アルフレッド・ド・ギニイの如き）は何に屬するか？

これはいづれも皆同じやうに類敗的な、また病的な現象ではないか？……道德的價值に關して、或は『彼岸』的虚構に關して、或は社會的災厄に關して、或は一般に苦惱に關して、過度に眞面目になるといふこと、一の狹隘なる視點をかくの如く誇張するといふことは、それ自體が既に病氣の一徴候である。肯定に對する否定の優勢についても同じ事が云はれる！

此點に於て混同されてならないものは、肯定の恐ろしき力と緊張——總ての豊富強大なる人間及び時代に特有の——から生ずる、否を言ひ、否を行ふことの悦びである。謂はゞ一の贅澤である。更に、恐るべきものに對抗するところの勇敢さの一形式。人は特に、恐るべく且つ疑はしいものであり、意志、理智、及び趣味に於けるディオニソスのものである故、恐るべく且つ疑はしいものに對する同感。

## I O I I

私○の○五○の○『○否○』

(1) 罪悪感情に對する、又刑罰概念を形而下的及び形而上の世界へ、並びに心理學へ、歴史の解釋へ持ち込むことに對する私の戰。あらゆる從來の哲學及び評價に、道德が浸潤しきつてゐるといふことの洞察。

(2) 傳統的理想に對する、基督教的理想に對する——基督教の信條的形式の廢棄されてゐる處にすらも——私の再認識及び發見。基督教的理想の危險さはその價值感情の中に、概念的表白をなくすまじ得るところのものの中に潛んでゐる。潜在的基督教（例へば音樂に於て、社會主義に於て）に對する私の戰。

(3) ルッソの十八世紀に對する、彼の「自然」に對する、彼の「善き人間」に對する、感情統御の彼の信仰に對する私の戰。人間を優柔にし、虚弱にし、道德臭くすることに對する私の戰。それらのものは、貴族主義的文化に對する憎しみから生れたところの、そして實際には節度なき怨恨感情の支配であり、戰の目的に對する尺度として發明されたところの理想である（基督教の罪過感情的道德は、怨恨的道德は賤民の一態度である）。

(4) 浪漫主義に對する私の戰。その浪漫主義に於ては基督教の理想とルッソの理想とが一致してゐる。だが同時に、僧侶的貴族的文化をもつた古代に對する、*Alte*に對する、「強い人間」——極度に雜種的な或るもの——に對する一の憧憬がある。一體に極端な情態を貴重し、その中に強さの徴候を見る

ところの、一の間違つた、模倣された種類のより、強き人間主義である（「欲情の禮拜」。豊饒からでなく、寧ろ缺乏より生ずるところの、*furore espressivo* 最も表現的な形式の模倣）。（十九世紀に於ては、比較的豊饒から、安樂から生れたところのものがある。快活な音樂など。詩人等の間では、例へばステ、フテルやゴットフリート・ケラアは、比較的に多くの強さや、內的の安樂の徴證である。偉大な技術及び發明力や、自然科學や、歴史（？）は、比較的に十九世紀の強さ及び自信の産物である。）

(5) 群畜的本能の超梁に對する私の戰。今科學は彼等と歩調を合してゐる。あらゆる種類の階級及び差別がそれで以て取扱はれてゐる、あの憎しみに對する私の戰。

### IOIII

豊饒の壓迫から、絶えず我々の内に成長しながら、尙ほ且つ放散することを知らないところの諸の力の緊張から、一の暴風雨に先立つものの如き一の情態が生じて来る。我々は自然の天空の如く、疊つて來るのである。これもまた「悲觀主義」である……かくの如き情態に結末をつけさせる——何物かを命令することによつて——ところの一の教。蓄積されたる諸の力が、よつて以て一の道を、一の目的を示され、その結果電光と行爲とへ爆發するところの價值倒換は、評價のやり直しは、全く何等の幸福論的な教であることを要しない。拷問苦にまで壓搾されてゐたところの力を釋放する限りに於て、

それはよく幸福を齎らすのである。

101111

快樂は權力感情のある場合に現れる。

幸福は——優勢になつて來た權力及び勝利の意識の中に。

進歩は種屬の強化、大なる意欲への能力。他の一切は誤解であり、危険である。

101114

ある時期には、欲情の假面舞踏及び道德的扮飾が反感を起させる。赤裸々にされた自然。権力量が決定的に單純なものとして（階級を決定するものとして）認められる場合。大なる様式が大なる欲情の結果として再び現れる場合。

101115

總ての恐るべき物を、ひとつひとつ、一步一步、實驗的に、役立たせて行くこと、この事を文化の使命はねがふ。しかし乍ら、この事を爲すに足るほど強くなるまでに、それは恐るべき總ての物と戦

ひ、緩和し、覆蔽することを、呪咀することをさへしなければならぬ。

苟くも一の文化が悪を指示するところでは、その文化は一の恐怖事情を、従つて一の弱さを表白してゐる。

論定。總ての善なるものは役立つものにされたる過去の悪である。標準のある時代、ある民族、ある個人が手段として用ひ得る故に、所有することを自らに許すところの諸の欲情が、恐しく且つ大きいものであればあるほど、その文化は愈々高い文化である。ある人間が凡庸で、虚弱で、卑屈で、臆病であればあるほど、彼は愈々事物を悪であるとする。彼に従へば悪の國が最も廣大である。最も低劣なる人間は悪の國（即ち彼に禁じられたる、そして敵視されたる國）を到處に見るのである。

101116

「幸福は徳につづ」かない。寧ろ強大者が彼の幸福な情態を先づ徳として決定する。

邪悪な行爲は強大者及び有徳者等に屬する。劣悪、低級な行爲は從屬者等に屬する。

最も強大な人間は、創造する者は、彼が其理想を總ての人間の理想に反して彼等の上に強ひ、彼等を彼自らの型に造り直す限りに於て、自ら最も邪悪なものであらねばならなかつた。この場合邪悪は、賤賤で、痛ましく、強制されてゐることの謂ひである。

ナポレオンの如き人々はつねに引き返して来て、個人の自己主權に對する我々の信仰を堅めさせて呉れなければならぬ。だが彼自身は、彼の用ひねばならなかつたところの手段によつて腐敗させられた。そして性格の氣高さを喪失した。異つた種類の人々の間に自己を主張して行く時には、彼は異つた手段を用ひ得たであらう。かくて一人のシイザアが劣悪にならねばならぬといふことは必然でなかつたであらう。

## 一〇二七

人間は非禽獸的禽獸と超禽獸との結合である。より、高き人間は非人間の人間と超人間との結合である。これらのものが一になつてゐるのである。人間が偉大さと崇高さとの方へ成長して行く度毎に、彼は深さと恐ろしさとに於ても成長する。我々は他を意欲することなしに一を意欲してはならぬ。或は寧ろ、人が一を徹底的に意欲すればするほど、彼は愈々徹底的に他を獲得しなければならぬのである。

## 一〇二八

恐ろしさは偉大さに屬してゐる。我々をして自らを欺かしめるな。

## 一〇二九

私は、如何なる「エピクウルの満足」もなし得られないほど、それほどの恐るべき事物に對する認識を教へた。單だディオニソスの快樂だけがやつて行ける。私こそ始めて悲劇的なものを發見したのである。希臘人等にあつては、彼等の道德家的淺薄さのお蔭で、それが誤解されてゐた。あきらめも悲劇の教訓ではなく、寧ろそれの一の誤解である！ 虛無への憧憬は悲劇的叡智の否定であり、その反對物である！

## 一〇三〇

豊富な、強大な魂は、痛ましき、その上恐るべき損失や、缺乏や、奪掠や、輕蔑をきりぬけて行くだけではない。それは此の如き地獄からより、大なる豐饒さと力強さを以て出て来る。そして最も肝要な事を云へば、愛の福祉に於ける新しい成長を以て出て来る。愛に於ける各の成長の最も奥深い條件を、どれだけか洞見したところの人は、ダンテが彼の地獄の門の上に「私をも永久の愛が造つた」と書いた時、ダンテを理解するであらうことを私は信ずる。

1031

近代的な魂の全周囲を周遊し、その一つひとつの片隅に坐つて見ること——私の野心、私の拷問苦、そして私の幸福。

實際に悲觀主義に打ち克つこと、其結果として、愛と善意とに充ちたゲエテ的な見方を自分の物にする事。

1032

我々が我々自らに満足してゐるかどうかは決して第一の問題でない。第一の問題はむしろ、我々がとにかく何物かに満足してゐるかどうかである。我々にして若し、單だ一の瞬間に然りを云ふならば、則ち我々はそれで以て、ただに我々自らにのみならず、また一切の存在に然りを言つたのである。なぜと云つて、我々自身の中にも、乃至事物の中にも、何物もそれ自らの爲めに立つてゐるのでない。そして單だの一度でも我々の魂が一の絃の如く幸福の前に震へ響いたならば、則ち總ての永久性がこの一事件を來す爲めに必要であつた。そして總ての永久性が我々の肯定の此唯だ一の瞬間に於て賞讃され、救済され、辯明され、肯定されてゐたのである。

1033

然りを言ふところの欲情。——誇り、悦び、健かさ、戀愛、敵對と戦争と、畏敬、美しい態度や作法、強い意志、高い理智性の訓練、權力への意志、地及び生命に對する感謝の心。富んでゐるところの、施與しようとするところの、また生命を贈り、飾り、永久にし、神聖にするところの總ての物——立派なものにする徳の全勢力——總ての賞讃するもの、然りを言ふもの、然りを行ふもの。

1034

道徳を取り拂つた一の世界に再び思ひ切つて生きるところの、我々少数者或は多數者は、信仰に於ける異教徒の我々は、我々は多分また、異教徒的信仰が何であるかを理解するところの最初の者であらう——人間より一層高い生命を想像せねばならぬこと、しかし善惡の彼岸に於てそれを想像せねばならぬこと。總てのより、高き存在を更に不道徳的存在として評價せねばならぬこと。我々はオリュムプを信ずる。そして「十字架につけられたる者」を信じない。

1035

より近代的な人間は、神に關する彼の理想化力を、太抵の場合それを愈々道德化することに於て、はたらかせた。これは何を意味するか？ 何等の善い事ではなく、人間の力の減退である。

本當のところ正反對が可能であつたらう。そしてその徴證がある。道德から自由にされたもの、豊饒なる人生の矛盾全體を包括するもの、またそれを神聖な苦痛の中に救済し辯明するものとしての神——彼岸としての、「善惡」といふみじめな立ちん坊道德の超越としての神。

一〇三六

我々に知られてゐる世界からして、人道主義的な神は證明されない。今日諸君はそこにまで論結すべく強制されていい。だが、それからして諸君は如何なる結論を引き出すか？ 「彼は我々にまで證明され得ない」——認識の懷疑。諸君は總て皆次ぎの結論を恐れる。曰く、「我々に知られたる世界からして、一の全く別な神が證明されるであらう。聊かも人道主義的でないやうな神が」と。そして一口に云へば、諸君は諸君の神に執着してゐる。そして彼の爲めに、我々に知られてゐないところの一の世界を發明するのである。

一〇三七

我々をして最高の善を神の概念より遠ざけしめよ。それは神にふさはしくない。我々をして更に最高の睿智を遠ざけしめよ。それは神といふ睿智の化物のあの無稽事をしでかしたところの哲學者等の虚榮心である。彼は出来るだけ哲學者等に似たものとして見られねばならなかつたのである。然り！神は最高の権力——これで十分だ！ そのあとに一切のものがつゞいて来る。そのあとに——「世界」も！

一〇三八

そして如何に多くの新しい神々が尙ほ可能であるかよ！ 宗教的な、云ひ換へれば神を創造する本能が折々不適當な時に潑刺として来る私自身にまで——神聖なものが毎度私にまで、如何に異つて、如何にさまざまに現れることぞ！……随分多くの奇異なる事物が、それらの時ならぬ瞬間——それは月からの如く人生へ落ち込んで来るのであり、そこで人は、人が既に如何に老いてゐるか、また人がまだ如何に若くあるであらうかを、全くもはや知らないのである——に於て、私の前を通り過ぎてゐる……私は神々に色々の種類のあることを疑はない……一定の譯けさ及び氣輕さなしには想見され得ないやうな神々もないではない……輕やかなる脚は恐らく「神」の概念に屬してさへもゐる……ある神が好んで俗人的な、また合理的な一切の物の彼岸に——我々の間で云へば、更に善惡の彼岸に——自らを



支持するを得ること、それを説明するのは必要であらうか？ 彼はその展望を拘束されてゐない——  
 デエテ流に云へば。そしてこの場合高く評價され過ぎることのあり得ないツァラトストラの權威に訴  
 へて云ふならば、ツァラトストラは「我はたゞ、舞踏することを知るところの神をのみ信ずべし」と  
 告白するところまで行つてゐる。

繰返して云ふが、如何に多くの新しい神々が尙ほ可能であることぞ！ もとよりツァラトストラ自  
 身は一個のふるい無神論者たるにすぎない。彼は舊い神をも、新しい神をも信じない。ツァラトスト  
 ラは「彼は……べし」と言つてゐる。けれどもツァラトストラは……ないであらう。人々よ彼を正し  
 く理解せよ。

創造者の精神の、「偉大な人間」の典型に従つて考へ出されたところの神の典型。

1039

そして如何に多くの新しい理想が實際に尙ほ可能であることぞ！ ここに、私が一の荒々しく寂し  
 い散策に於て、總ての五週間に於て、一の演習的た悦びの天色をした瞬間に摺むところの一の小さな  
 理想がある。華車な、不條理な事物の間に生涯を送ること。實在性への路傍の人。半ば藝術家、半ば  
 烏及び形而上學者。實在性に對して然りと否とを言はないで——ある善き舞踏者のやり方にならつ

て、足のつまさきで折々それを承認するといふことのほかに。つねに何等かの幸福の日光に探ぐら  
 れて。悲哀によつてすらも救はれ勵まされて。なぜと云つて、悲哀は幸福な人を保存するのだから。  
 最も神聖な事物にすらも諧謔の小さな尻尾をくつつ着けながら。これは、自からにして明白である如く、  
 一の重さ、重つ苦しい精神の、重壓の精神の理想。

1040

魂の士官學校から。(勇敢なる者、快活なる者、禁慾的なる者等にささぐ)。

私は諸の愛すべき徳をいやしめることを欲しない。けれども魂の偉大さはそれらの徳と一致しない。  
 藝術家等に於てすらも大なる様式は單に愉快なだけの總ての性質を斥けるのである。

痛ましく緊張した、そして傷つき易い時に於ては戦を選べ。戦は強固にする。戦は筋肉を鍛え上げ  
 る。

深く傷けられたる者等はオリュムプの笑を有つてゐる。人は唯だ、彼の必要とするところのものを  
 み有つてゐるのである。

それは既に十年間を持續してゐる。如何なる物音も私の處へとどかない——雨のない國へ。人は此の如き乾燥地に弱り果ててしまはなことを爲め、多分の人情を殘してゐなければならぬ。

IOE I

「然り」への私の新しい道。——私がこれまで理解して、そして生活して來た如き哲學は、生存の忌まはしくむごたらしき方面に對しても、わざわざ爲されるところの追求である。氷雪や沙漠を通しての斯様な漂泊が私に與へたところの長い經驗から、私はこれまで理窟をつけられてゐたところの一切の物を、別な見方で見ることを學び知つた。かくれたる哲學史が、その偉大なる諸の名稱の心理が私に對して明白なものになつて來た。「如何に多くの眞實を堪へるか、如何に多くの眞實を一の精神が物ともしないでゐられるか？」——これが私にとつて本當の價值標準になつた。誤謬は一の臆病さである……認識に於けるあらゆる獲得は勇敢さから、自分自身に對する嚴格さから、自分自身に對する清潔さから生じて來る……私が生活してゐる如き、一の斯様な實驗哲學は、最も原則的な虛無主義の可能性をさへ前觸れして見てゐる。だが斯う言ふのは、その實驗哲學が一の否定に、一の否に、否への意志に立ちどまつてゐることを意味しない。それは寧ろ反對な物にまで、世界に對するディオニソ

スの肯定にまで行かうとする——あのやうに、滅殺も、除却も、選擇もなしに。それは永久の循環を欲する。同一の事物を、同一の論理及び非論理を。ある哲學者の到達し得べき最高の情感——人生に對してディオニソスの態度をとること。これに對する私の方式は *amor fati* (宿命愛) である。

この爲めには我々は、人生のこれまで否定されてゐた方面を必要なものと考へるのみならず、更に願はしいものとも考へなければならぬ。そしてこれまで肯定されてゐた方面に關して願はしい(謂はば其補足物又は準備條件として)のみならず、更にそれらの物自體の爲めに、人生の意志がより明白に表白される、そのより力強き、より恐るべき、より眞實な方面としても願はしいものと考へなければならぬのである。

この爲めには我々は又、人生のこれまで單獨に肯定されてゐた方面を評價しなければならぬ。我々は何處から此評價が出て來るか、如何にそれが人生に對するディオニソスの評價と交渉するところ少きかを理解しなければならぬ。私は此際何が實際に然りを言つてゐるかを選択し且つ理解した(第一には苦惱者の本能、第二には群畜の本能、そして第三には非凡者等に反對する大多數者等の本能)。

かくして私は、如何なる程度まで一のより強い種類の間人が、必然的に一の異つた方面へ、人間を引き上げることを考へ出さねばならなかつたかを洞見した。善惡の彼岸にある、苦惱の、群畜の、また大多數者の世界からの由來を否定し得られないところの、あの價值の彼岸にあるより、高い生物等が。

私はこの反対な理想形成の興件を歴史の中に捜し求めた(『異教的』だとか、『古典的』だとか、『高貴』だとか云ふ概念が新しく発見され、提出された)。

一〇四二

如何に希臘の宗教が猶太教的基督教のそれより一層高いものであつたかを證明すること。後者が勝ち得たのは、希臘の宗教自體が墮落(退歩)してゐたからである。

一〇四三

復び結合を見出す爲めに二千年を要するといふのは、驚くべきことでない。二千年位は全くのところ何でもないのである！

一〇四四

單に食つたり飲んだりばかりをでなく、總ての所行を神聖にするところの人々があらねばならぬ。そしてそれらの物に對する記憶に於て、或はそれらの物との合一に於てばかりでなく、又つねに新しく、且つ一の新しい仕方ですて此世界は頌揚されねばならないのである。

一〇四五

最も理智的な人々は他の人々——「より、肉的な心情」をもつた人々——が全然想像することの出来ないやうな、加之、想像することを許されないやうな仕方ですて、感覺的事物の刺激及び魅力を得得る。彼等は最善の信仰をもつた感覺主義者である。なぜならば、彼等はあのこまやかな飾に、あの薄くし小さくする装置に、或は名稱の如何を問はず、民衆の言葉に於て「精神」と呼ばれてゐるところの物に許容するより、一のより、根本的な價值を諸の感官に許容するからである。諸の感官の力と力強さ——これが一の出來のよい、そして全一的な人間に於ける最も本質的なものである。最初に先づ立派な「禽獸」がゐなければならぬ。でなかつたら、總ての「人間化」に何の價值があるか？

一〇四六

- (1) 我々は我々の感官と、それらの物に對する信仰とに執着し——そしてそれらの物を終結として考へようとする——これまでの哲學の反官能主義は、人間の最大の馬鹿らしさである。
- (2) 總ての地上的な生き生きしてゐる事物が、見えてゐる通りに(持續的に、また徐々に動いてゐるのだ)それ自らを建造したところの現存世界を、我々は更に建造しつづけようとする。けれども虚

偽なものとして批評し去らないで！

(3) 我々の評價は建造の手續きを手傳ふ。それらの評價は強調し力説する。諸の宗教全體が、「一切は悪しく、偽りで、邪である！」と言ふ時、それは如何なる意味を有するか？ 全經過のこの非認は、ただ出來損ひの人々の一判断のみあり得る！

(4) 勿論、出來損ひの人々は最大の苦惱者であり、従つて最も七面倒な者であつたかも知れない！満足者等は多くを値してゐなかつたかも知れない！

(5) 我々は『生活』と稱する藝術的根現象を理解しなければならぬ。最も都合悪るき事情の下に、最も遅々たる仕方にて建造するところの建造的精神を——そのあらゆる結合に對する證據は先づ新に與へられねばならぬ。それはそれ自らを保存する。

一〇四七

性慾や、支配慾や、外觀及び欺瞞による悦樂や、人生及び其典型的情態に對する大なる悦ばしき感謝の心や、これらのものは異教にまで本質的であり、良心のやましさを味方にしてゐる。非自然（希臘の古代事物に於て既に）は道德として、辯證法として異教的なものと戦ふのである。

一〇四八

一の反形而上學的世界觀——然うだ、けれども一の藝術的なもの。

一〇四九

アポロの理想。美しい形の永久性。「それは常にあるべきだ！」といふ貴族的立法。

ディオニソス——肉感性と残忍性と。生存の無常さは生殖的な、また破壊的な力として、持續的創造として説明し得られた。

一〇五〇

「ディオニソス的」といふ言葉によつて表白されるのは、單一性への衝動。人格や、尋常茶飯事や、社交や、實在性を超越しての、無常の深潭を超越しての翱翔。より、暗黒な、より、豊饒な、より、不安定な情態に於ける、熱情的に痛ましき横溢感。あらゆる變化の中に同様であり、同様に強大であり、同様に幸福であることを失はないものとしての、生存の總體的性格に對する陶酔的肯定。生存の最も恐るべき、また最もいかにしき諸の性質をすら頌揚し神聖視するところの、大なる汎神論的共樂及び共苦。

生殖への、多産への、回歸への永久的意志。創造及び滅却の必然性に關する統一感情。「アポロンの」といふ言葉によつて表白されるのは、完全なる獨存への、典型的「個體」への、單純にし、顯著にし、強固に、明白に、曖昧に、典型的にする一切の物への、律法の範圍内なる自由への衝動。

この二の自然的藝術力の對立にまで、藝術の發展が必然的に結びつけられてゐるのは、兩性の對立にまで人間性の發展が必然的に結びつけられてゐるのと同じである。力の豊饒さと節度と、一の冷かな、氣高い、控へ目な美しさに於ける自己肯定の最高形式——希臘的意志のアポロン主義。

希臘人の魂の内なるディオニソスのものとアポロンのものとのこの對立は、私をして希臘的事物の本質にまで引きつけられるやうに感ぜしめたところの大きな謎の一である。實際私は、何故丁度希臘のアポロン主義が一のディオニソスの地盤から生じて來なければならなかつたかを洞察することのほか、何物についても心を勞しなかつた。ディオニソスの希臘人はアポロンのになることを必要としたのである。即ち巨怪なもの、複雑なもの、不確實なもの、恐怖すべきものへの彼の意志が、節度への、單純さへの、規則及び概念に對する服従への一の意志によつて、打ち碎かれてしまふことを必要としたのである。節度のないもの、荒涼たるもの、亞細亞的なのが彼の根柢に横つてゐる。希臘人の勇敢さは彼の亞細亞主義との戰の中に成立してゐる。彼に美が賦與されてゐないのは、論理が、道

義の自然性が賦與されてゐないのと同じである。それらの物は略取され、意欲され、戰の目的にされてゐる。それらの物は彼の、希臘人の戰利品である。

一〇五二

生存がそれ自らの醇化を祝するやうな、人間の最も高き、また最も氣高き悦びへ到達するのは、當りまへの事乍ら、最も希れな、最もうまく行つた場合だけである。そしてこれも、これらの希なる生物等自身及び彼等の祖先等がこの標的へ導く一の久しく準備されたる生活を營みながら、つひに此標的を意識しないでゐるといふやうな場合に限られてゐる。その時最も複雑な力の充ち溢れるところの夥しさを、「自由な意欲」の最も敏活なる力と、君臨者の命令とが、一人の人間の内に互に伸善くやつてゐる。その時、官能が理智の中に落ちつき寛ろいである如く、理智も官能の中に寛ろき落ちつきいてゐる。そして理智の中のみ起るところの總ての物が、官能の中にも一のこまやかな異常な幸福と活動とを氣儘に働かせてやらなければならぬ。そして反對の場合も同様である。人々よ、ハアフィスのやうな人物の上に此反對の場合を考へて見るがよい。ゲエテすらも、如何にはつきりしない形に於てであるとは云へ、この經過に對する一の豫感を與へてゐる。多分、此の如き完全な、上出來な人々にあつては、最も官能的な機能が遂に、最高の理智性の象徴的陶醉によつて醇化されるのである。彼等は彼等

自身で肉體の神化のやうなものを感得する。そして「神は一の精神である」といふ命題をもつた禁欲主義哲學から最も遠く離れてゐる。その命題から明白にされるのは、その禁欲主義者が「出來損つた人間」であるといふこと——ただ一の或る物だけを、そして恰も審くところの、また罪にさだめるところの或るものを善なりとし、「神」なりとする、「出來損つた人間」であるといふことである。

人間自身が、また彼自身を全く神化された形體として、並びに自然の自己辯明として感得する、あの悦びの高處から、健康な農夫等及び健康な半人獸等の悦びに至るまで、幸福の光彩のこの長き巨大なる段階を希臘人は——一の祕密を傳授された者の感謝にみちたる身震ひなしにはなく、色々の用心深さと敬虔なる沈黙となしにでなく——ディオニソスといふ神の名で呼んだ。そもそも總ての近代人等は、一の碎け易い、複雑な、病的な、奇異なる時代の兒等は、希臘的幸福の範圍について何を知つてゐるか？ 彼等はそれについて何を知り得たか？ 「近代的觀念」の奴隸がそもそもディオニソスの祝祭への權利を何處から獲て來たか？

希臘的肉體と希臘の心靈とが「花盛り」であり、そして病的な陶醉及び狂暴の情態の中なんぞになかつた時、これまで地上に實現されたる最高の世界肯定及び生存醇化の、あの祕密の多い象徴を生じた。それまで生ひ立つた一切の物を、あまりにも短く、あまりにも貧しく、あまりにも狭く見えしめるやうな、一の標準がここに與へられてゐる。苟くも「ディオニソス」といふ言葉を、ゲエテだとか、

ベエトオフンだとか、シキスピアだとか、ラファエルだとかいふやうな、最善のより、新しい名稱及び事物の前で口にするならば、忽ち我々は我々の最善なる事物と瞬間とが罪にさだめられてゐることを感得する。ディオニソスは一個の審判者である！ 私の言ふ事は理解されたであらうか？ 何等の疑ひもなき事實として、希臘人等は「魂の運命」の最終の祕密を、また彼等が教育や淨化について、特に人間と人間との間なる動かし難き階級制度及び價値の不平等について知つたところの一切の物を、彼等のディオニソスの經驗から解釋しようとする。ここに總ての希臘的なものにとつての大なる深み、大なる沈黙がある。この隠れたる地の中の入口がまだ塞がれたままである限り、人々は希臘人等を知らないのである。厚かましく無遠慮な學者の目は此等の事物の中に何物をも決して見ないであらう——如何に多くの博識が矢張りあの發掘に役立たす爲めに用ひられねばならないにもせよ。ゲエテやキンケルマンの如き古事物の友の高貴なる熱心すらも、丁度此點に於ては或る許されぬ物、殆んどいけ、圖々しい物を有つてゐる。待ち、そして自分自身を準備すること。新しい泉の湧き出るのを待つこと。寂寥の中に見知らぬ顔や聞き知らぬ聲に對して自分自身を準備すること。この時代の穢の市的な塵埃雜鬧から其魂を愈々清潔に洗ひ淨めること。一切の基督教的なものを超基督教的なものによつて克服すること（そして自分自身から脱却するばかりでなく）——なぜと云つて基督教的なものはディオニソスの教説と正反對なものであつたから。南方を自分自身の内に再び發見し、また南方の明るい、

輝いてゐる、神秘的な天を自分自身の上に張り渡すこと。魂の南方的な健かさと隠れたる力強さを自分自身の爲めに復び略取すること。一步一步より廣大になり、より超國民的に、より、歐羅巴的に、より、超歐羅巴的に、より、東洋的に、結局より、希臘的になること——なぜと云つて希臘的なものは、あらゆる東洋的なものの最初の大きな統一綜合であり、又その故にこそ歐羅巴的な魂の發端であり、我が『新しい世界』の發見であるのだから。此の如き直言命令の下に生きてゐる人に、何が早晩其人に出會ふかも知れないことを、誰がまた知つてゐるだらう？ 恐らくは他ならぬ——一の新しい日

一〇五二

ディオニソスと十字架につけられた者との二の型。——典型的に宗教的な人間が一のデカダン形式であるかどうかをたしかめること（偉大なる改革者等はいづれも皆病的であり、癡癡持ちである）。だが其場合我々をして宗教的人物の一の型、即ち異教的人物を除外せしめるな。異教的祭式は人生に對する感謝及び肯定の一形式ではないか？ その最高の代表者は人生に對する一の護教及び神化であつてはならなかつたか？ 一のうまく出来てゐる、狂喜の中に充ち溢れてゐるところの精神の典型！ 生存の矛盾と疑はしさを自らの内へ取り入れ、そしてそれを解き和らげてしまふところの精神の典型！

ここから私は希臘人等のディオニソスを持つて来る——人生の宗教的肯定。否定された人生や、はんにされた人生でなく、全き人生の宗教的肯定（この祭式に於て性的行爲が奥深さと、神秘と、畏敬との觀念を起させるのは典型的である）。

ディオニソス對「十字架につけられたる者」。そこに諸君は對照を見る。それは殉教に關しての差異ではない。ただそれが一の異つた意味を有つてゐるのだ。生命その物は、生命の永久的な豊饒さと回歸とは激痛を、破壊を、滅盡への意志を喚起する。他の場合、「罪なき者としての基督」の苦惱は、この生命への駭撃に、生命に對する彈劾の方式になつてゐる。讀者諸君の忖度されるであらう如く、問題は苦惱の意義の問題である——一の基督教的な意義であるか、または一の悲劇的な意義であるかといふ問題。前の場合に於ては、それは一の神聖な存在への道であらねばならぬ。後の場合に於ては、苦惱の巨大なる量をも辯明すべく、存在その物が十分に神聖なものと見なされてゐる。悲劇的人物は最も粗硬なる苦惱をも肯定する。彼はそれを爲すに足るほど強健で、豊富で、神化の力をもつてゐる。基督教的人物は地上に於ける最も幸福なる運命をさへ否定する。彼は如何なる形式に於ても人生からの苦惱を経験するに足るほど、弱く、貧しく、落ちぶれてゐるのである。十字架の上なる神は人生に對する一の呪咀であり、それから自らを救ひ出させようとする一の指標である。粉碎されたるディオニソスは人生に對する一の約束である。それは永久に生れかはり、破壊の間から新しく出て来るであらう。

### III 永久の回帰

一〇五三

私の哲學は、結局あらゆる他の考方を滅亡せしめるところの、戦勝者の思想を展開する。それは大なる訓練的思想である。これに堪へない種族等は破滅するものときまつてゐる。これを最大の禍社として感受する者等は、支配者になるべきことを定められてゐる。

一〇五四

最大の戦闘。その爲めに一の新しい武器が必要である。  
鐵槌が、一の恐るべき決定が喚び出されねばならぬ。歐羅巴は没落への彼の意志が本當に「意欲」してゐるかどうかといふ、のつびきならぬ断案の前に引き出されねばならぬ。  
平凡化に對する警戒。寧ろ没落しようとも！

一〇五五

一の悲觀主義的な考方及び教は、一の陶醉的な虚無主義は、場合によつては哲學者にまで缺くべからざる物でさへもあり得る。よつて以て彼が頽敗し衰亡し行くところの種族をぶつ潰し、生存の外へ片付けてしまふ、一の強大なる壓迫力及び鐵槌として。それに依つて彼は人生の新しき秩序に道を開く。或は頽敗してゐる、そして衰亡し行かうとするところの者にまで、結末への願望を注入するのである。

一〇五六

私は、自らを抹殺することの權利を多くの人々に與へるところの思想を教へようと思ふ——偉大な訓練的な思想を。

一〇五七

永久の回帰。一の豫言。

(1) 教の表現、及びその理論的前提と歸結と。



(2) 教の證明。

(3) それに信じられるといふことから生じて來さうな結果（それは一切のものを打開する）。

(a) それに堪へることの手段。

(b) それを除き去ることの手段。

(4) 一の中間物としての、歴史上のその地位。

最高の危険の時代。

諸の民族及びその利害を超越して、一の寡頭政を建設すること。一般人類の爲めの政策の方へ向はせるところの教育。

イニズイイト主義の反對物。

一〇五八

この最も大なる（獨逸人から發見されたる）哲學的見地。

(a) 生成の、發展のそれ。

(b) 生存の價值にもとづいたそれ（だが、獨逸の悲觀主義のあのみじめな形式は先づ超克されなければならぬ！）

二の見地は私によつて 決定的な仕方にて綜合されてゐる。

一切の物は生成し、永久に回歸する——脱出は不可能である！ 我々にして若しも、生存の價值を批判し得たとしたら、その結果はどうなるであらう！ 回歸の思想は、力（及び野蠻性！！）に奉仕する、選擇の原理。

この思想に對する人類の成熟。

一〇五九

(1) 永久の回歸の思想。それが眞實である時、眞實であらざるを得ないところの其前提。それから出て來る結果。

(2) 最も重苦しい思想として。妨げられないでゐる場合、換言すれば、一切の價值が評價し直されないでゐる場合、生じて來さうに思はれる其結果。

(3) それに堪へることの手段。一切の價值の倒換。もはや、たしかさを悦ばないで、寧ろふたしかさを悦ぶこと。もはや「原因と結果と」でなくして、寧ろ間斷なく創造的であること。もはや保存への意志でなくして、寧ろ権力への意志。もはや「それは總てが主觀的たるに過ぎないのだ」といふ卑下した言ひ方でなくして、寧ろ「それは更に我々の所作である！ 我々をしてそれを誇らしめよ！」

である。

一〇六〇

回歸の思想に堪へる爲め必要なのは、道德からの自由。苦痛といふ事實に對する新しい療法（苦痛を快樂の道具として、快樂の父として理解すること。そこには不快の如何なる附加意識もない）。かの極端なる宿命論への反對物としての、あらゆる種類の不確實さや誘惑性による享樂。「必然性」概念の除却。「意志」の除却。「認識その物」の除却。

人間の力意識を最も多く高めるもの——超人を創造するものとしての。

一〇六一

二の最も極端なる考へ方——器械論的のそれとプラトンのそれと——は永久の回歸の中に調和する。どちらもが理想として。

一〇六二

若しも世界が一の標的を有つてゐたならば、それはもう到達されてゐるに違ひない。世界にとつて、

一のもくろまれたのでない終極情態があつたとすれば、それも同様に到達されてゐたに違ひない。それが苟くも一の停止または硬直に、一の「存在」に能力を有つてゐたならば、それが總てのその生成の中なる單だの一瞬間だけでも、「存在」のかうした能力を有つてゐたであらうならば、あらゆる生成がまた、従つてあらゆる思考、あらゆる「精神」もとづくにお仕舞ひになつてゐたであらう。一の生成としての「精神」の事實は、世界が如何なる標的をも、如何なる終局情態をも有つてゐないといふこと、そして存在の能力を有つてゐないといふことを證明する。しかし乍ら、あらゆる現象に關して標的を考へ、世界に關して一人の指導するところの創造的な神を考へることの舊い習慣が大變に強く働いてゐる爲め、思想家は自分自身世界の標的なさを復び意圖として考へることを避ける上に骨が折れるのである。斯く世界が故意に一の標的を避け、あまつさへ一の回轉運動へ陥らないやうにする巧妙な手段を知つてゐるといふ考は、世界にまで永久に新しくなる力を歸しようといふところの總ての人々の頭に——「世界」の如き一の有限な、一定した、不變に大きさを同じうする力にまで、その形式や位置を無限に新しくして行くことの奇蹟的能力を歸しようといふところの、總ての人々の頭に浮んで來なければならぬ。世界はもはや何等の神でもないとは云へ、尙ほ且つそれは神的な創造力に、無限の變化力に適當したものであらねばならぬ。それはその舊い形式のどれにでもあともどりすることを、わざわざ自らに禁制しなければならぬ。それは單にあらゆる繰返しの前に自分自身を警戒

すべき意圖を有するのみならず、更にその手段をも有しなければならぬ。かくしてそれは各の刹那刹那に、その運動の一つひとつを制御して、標的を、終極情態を、反復を避けるやうに——そして此の如き想しがたく調子の狂つた思考及び願望の仕方から生ずる爾除一切の結果を避けるやうにしなければならぬ。あれは矢張り思考及び願望の古い宗教的な行き方である。何等かの仕方に於て矢張り世界が古い、愛せられたる、無限の、無限に創造的な神に似てゐるといふこと、何等かの仕方に於て矢張り「舊い神がまだ生きてゐる」といふことを信じようとする一種の憧憬である。"deus sive natura" (彼はその上, natura sive deus" を感得した) といふ言葉の中に表白されてゐるところの、スピノオザのあの憧憬である。だがそもそも、あの決定的な變調が、宗教的な、神を工夫し出すところの精神に對する科學的精神の、今日獲得されてゐるところの優勢が、最もはつきりと方式化されてゐるところの命題及び信仰は何であるか？ それは斯う云つたものではないか？——力としての世界は、無限なものに考へられてはいけない。なぜと云つて、それはそのやうに考へられることが出来ないのだから。我々は一の無限なる力といふ概念を、「力」といふ概念と兩立しないものとして、我々自らに禁斷する。斯くて世界には永久に新しくなることの能力も缺けてゐるのである。

一〇六三

エネルギー存続の原理は永久の回歸を要求する。

一〇六四

一の平衡情態が會つて到達されなかつたといふことは、それが可能でないといふことを證據立てる。しかし乍ら或る不定の空間に於ては、それが到達してゐたに違ひない。球形的空間に於ても同様である。空間の形態は永久的運動の、また結局あらゆる「不完全さ」の原因であらねばならぬ。

「力」と「休止」と「不變」とが互に矛盾し合ふといふこと。力の尺度は(量的に)固定されてゐる。だが其本質は流動的である。

「時間なきもの」は斥けられねばならぬ。力のある一定した瞬間に於ては、あらゆる其力の或る新しき分布に對する、絶對的な諸條件が現存してゐる。それは靜止したままでゐられぬ。「變化」は本質の一部である。従つて時間性も同様である。だがこれでは、單に變化の必然性が今一度概念的に確立されてゐるにすぎないのである。

一〇六五

かの皇帝は、一切の事物を餘りに重大視しすぎないで、そして彼等の間に安靜を失はないでゐること

との爲め、それらの事物の果敢なさを常に目にとめてゐた。反對に、一切の事物は私にまで、それほど果敢ないものであり得べく、ずつとずつと價値を有ち過ぎてゐるやうに思はれる。私は各の事物の爲めに一の永久性を求めぬ。人は最も高價なる香油と葡萄酒とを海に注ぎ入れてよいものだらうか？ 私の慰めは、ありしところの一切の物が永久的であるといふこと、海が復び打ち上げて來るといふことである。

一〇六六

世界に對する新しき概念。——世界は存續してゐる。世界は生成して來るところの何物でもなく、消滅してしまふところの何物でもない。或は寧ろ、世界は生成し、消滅する。だが、それは曾つて生成し始めたことがなく、曾つて消滅しやめたことがない。それは何れの情態に於ても自らを支持する？……それはそれ自らを食物としてゐる。その排泄物がその營養である。

一の創造されたる世界といふ假説は一瞬時も我々の心を煩はさしめないでよい。「創造する」といふ概念は今日全く輪廓をつかみがたく、想像に盡きがたいところのものである。それは迷信時代の產物であるところの一の言葉たるにすぎない。一の言葉では何物も説明されない。始めあるところの一の世界を概念に浮べようとする最後の試みは、近頃度々ある論理的な手續きに力みかりて爲されてゐる

——太抵の場合、諸君が推察するであらう如く、一の神學的な内密の意圖からして。

人々は近頃度々、「世界が後方へ無限の時間を有つてゐる」(regressus in infinitum)といふ概念の中に一の矛盾を見出さうとした。そして人々はそれを見出しさへもした——勿論、その際頭と尻尾とを混同するやうな拙い事になりながらではあるが。私が此瞬間から後方へ計量しながら、「私は決して結末へ達しないであらう」と言ふのを、何人も妨げることは出来ない。私が同一の瞬間から前方へ果てなく計量し得る如く。私がこの regressus in infinitum といふ正確な概念を、現在に至るまでの果てなき Progressus といふ全く想像に盡くことの出来ない概念と同一に見てしまふやうな過誤——私はそれをやらないやうに氣をつけるであらう——を犯さうとした時にこそ、私が方向(前方へ又は後方へ)を論理的にどうでもよいものと考へた時にこそ、私は頭をつかまへ乍ら——同じ瞬間に——尻尾をつかまへてゐると思ふであらう。デュウリング君よ、私は此樂みを君にまかせて置かう！……

私は私より以前の思想家等に於て、此思想にぶつかつた。そしていつでもそれは他の内密の動機(太抵は Creator spiritus に都合よく、神學的な動機)によつて決定されてゐた。苟くも世界が硬化し、乾燥し、滅亡し、虚無になり得たならば、或は世界が一の平衡情態に到達し得たならば、或は苟くも世界が、時間の繼續を、不變性を、それつきりを包容するところの一の標的を有つてゐたならば(手短かに、形而上學的に云へば、生成が存在の中へ、または虚無の中へ流れ込んでしまひ得たならば)。

この情態は既に到達されてゐたに違ひない。しかるにそれは到達されてゐないのだ。その結果として……これはそれ自體に於て可能なる世界の假説の大群に對する正誤表として役立つべく、我々が掌中に握り得る唯一の確實さである。例へば器械論、唯物論にして若し、キリアム・タムスンがその爲めに引き出したやうな一の終極情態の論理的歸結を脱却し得ないならば、則ち唯物論はそれに依つて駁撃されるのである。

この世界にして若し、力の一定の大きさとして、又力の中心の一定數として考へられていいならば——そしてあらゆる他の觀念は不定のまま、従つて不用のままであるならば——則ち世界はその生存の大なる賭博に於て、結合の計量し得べき數を通りぬけねばならぬことになる。ある無限の時間内には、各のあり得べき結合がいつかしら實現されてゐるだらう。その上、それは幾度と限りなく實現されてゐるだらう。そして各の結合とその次ぎの回歸との間に、苟くも尙ほあり得べき總ての結合がはいつてゐなければならず、そして此等の結合の各が次序を同じうする結合の全行列を規定する故に、絶對的に同一の次序をもつた一の回轉運動がかくの如く證明されてゐる。即ち世界は限りなく屢々既に反復されたところの、又其活動を永久に亘つてやるところの回轉運動である。この概念は單に器械論的、唯物論的なものではない。なぜと云つて、若しもさうであつたならば、それは場合を同じうする無限の回歸を規定しないで、寧ろ一の終極情態を規定するであらう。世界がそんな情態に到達してゐない

故に、唯物論は我々にまで不完全な、單なる準備的假説と見なされざるを得ないのである。

一〇六七

そして諸君は又、「世界」が私にまで何であるかを知つてゐるか？ 私は諸君にまでそれを私の鏡に於て示すべきであらうか？ この世界は、始めもなく終りもない、力の怪物。より大きくも、より小さくもならないところの、自らを消耗しないで、ただ變化するばかりであるところの、一の固定した、黄銅の如き力の量。全體としては不變の大きさで、その經濟は支出もなく損失もなく、けれども同様に増加も收入もなく、その限界からの如く「虚無」から取り圍まれてゐる。それは何等の漠然たる物でなく、何等の浪費されたる物でなく、何等の無限に擴げられた物でなく、寧ろ一定した力として或る一定した空間に置かれてゐる(何處かに「空虚」であつたところの或る空間にでなく)。寧ろ力としては到處にあり、諸の力及び力の波の活動としては、一にして同時に多であり、ここで自らを集積してゐるかと思へば、同時にそこで自らを減少してゐる。それはそれ自身の中に暴れ狂ふ諸の力の海で、回歸の巨大なる年數と共に、その形態の満潮干潮と共に、永久に自らを變化し、永久に引き返して來る。それは最も單純な物からして最も複雑な物を造り出し來る。最も靜かなもの、最も硬いもの、最も冷いものから、最も熱烈なもの、最も野蠻なもの、自分自身に最も矛盾したものへはいり、そして

再び豊饒から簡素なものへ引き返し、矛盾の活動から協和音の悦びにまで引き返して来る。それはその進路及び時代のかうした同一性の中にすらそれ自らを肯定する。永久に回歸しなければならぬ物として、何等の飽満をも、何等の嫌悪をも、何等の倦怠をも知らない一の生成として、それ自らを祝福する。——永久に自己を創造するところの、永久に自己を破壊するところの此私のディオニソス的世界、二重の放逸さをもつた此神秘的な世界、圓環の中に一の標的があるのでなかつたら、何等の標的を有しないと、この私の『善悪の彼岸』——この世界に對して諸君は名をつけようと欲するか？ あらゆる諸君の謎に對する一の解決があるか？ 最も隠れたる者、最も強き者、最も恐れを知らざる者、最も眞夜中の如き者等よ、諸君に對しても一の光があるか？ この世界は權力への意志であつて、そのほかなる何物でもない！ 諸君自らも、この權力への意志であつて、そのほかなる何物でもないのである！

——「權力への意志」下巻了——

大正十四年三月十一日印刷 大正十四年三月十四日發行	
(定價貳圓五拾錢)	
< 志 意 の へ 力 權 >	
發 行 所	發 行 者
東京市牛込區矢來町三番地	東京市牛込區矢來町三番地
新 潮 社	生 田 長 江 佐 藤 義 亮
電話牛込區 八八八八 〇〇〇〇 九八七六 香香香香	
番二四七一(東京)總編	
印 刷 所	東 京 市 小 石 川 區 西 江 戶 川 町 電 話 小 石 川 五 九 二 番
富士印刷株式會社	印 刷 者 佐々木俊一

1962  
元

思想·文藝講叢書

■ (1) 近代思想十六講 中澤臨川著 (七十二版) 生田長江著 (七十二版) 送料拾貳錢	■ (2) 社會問題十二講 生田久長雄著 (四十一版) 本間久雄著 (四十一版) 價貳圓 送料拾貳錢	■ (3) 近代文藝十二講 生田長江野上白川著 (三十一版) 森田草平昇曙夢著 (三十一版) 貳圓參拾錢 送料拾貳錢	■ (4) 近代劇十二講 楠山正雄著 (第十四版) 參圓五拾錢 送料拾八錢	■ (5) 改造思想十二講 宮島新三郎著 (二十一版) 相田隆太郎著 (二十一版) 貳圓五拾錢 送料拾貳錢	■ (6) 近世文學十二講 高須芳次郎著 (第十一版) 貳圓五拾錢 送料拾貳錢	■ (7) 現代文學十二講 高須芳次郎著 (第十一版) 貳圓五拾錢 送料拾貳錢	■ (8) 小說研究十六講 木村毅著 (第五版) 貳圓五拾錢 送料拾貳錢
--	--	--	--	---	--	--	---

375

3



終

